■ 特別研究会

現代青年考

―生涯学習の視点から―

昭和８年、長野生まれ。東京大学教育学部卒業。
東京大学大学院人文科学研究科教育行政学（社会教育学）博士課程修了。
現在、名古屋市社会教育委員協議会副会長、
青年の家運営審議会々長、高年大学運営委員長等。
著者：「青年団論」（日本青年団協議会発行）他。

那須野　隆　一　（日本福祉大学教授）

星　野

これから人間関係研究センターの22回目の研究会を始めさせていただきます。今日は特に、名古屋市の教育委員会の社会教育課の方々、名古屋市の生涯学習教育センター、そして南山学園のコミュニティカレッジからも御出席いただいて、今から先生のお話をお聞きして、途中で休憩をはさみまながら、その後意見交換などしていきたいと思っております。お招きしましたのは、日本福祉大学の教授をなさっておられます那須野隆一先生です。今日皆さんがたの前にレジメがございますが、現代青年考ということで、生涯学習といろいろ言われているけれども青年としての視点が抜けているのではないかということで、そういうことも踏まえながら話していただけると思います。よろしくお願いします。

那須野

日本福祉大学の那須野です。よろしくお願いします。はじめにお断りしておきますが、一週間前に、北海道札幌へ伺いましたら、札幌というところは室内の温度と室外の温度の差が40度ぐらいありまして、室内で汗びっしょりになってはまた外へ出て震えているということを繰り返しました。どうもかぜをひいてきたらしいので、お聞き苦しいと思いますけれども宜しくどうぞお願いします。

今日のテーマは、現代青年考という厳しいテーマをつけさせていただきましたが、私は普段割合と青年の人たちに、大学でもそうですし、社会教育の関係でもそうですが、青年の人たちを対象に、話をする機会が多うございます。そこではできるだけ、フランクにおしゃべりをしようなどということを心がけておりますものですから、学術的なお話に堪えられますかどうか、その点は宜しくお願いします。それから、二つ目は私、名古屋市を中心に、割合行政の各種

の委員会にかかわっておりまして、行政における施策の立案のようなところで、仕事をすることが多うございましたものですから、お話もどうしてもそういう角度からの問題提起のようになろうかと思います。以下レジメにそいましてお話をしてまいりたいと思います。

はじめに私の方から、話題提供、問題提起をさせていただきますので、後でご討議、ご意見をたまわれればというふうに思っております。それから一枚の別紙は、必要に応じて説明させていただくことにしまして、はじめのところに、まず第一に大きな見出しとしまして、現代青年の人間関係意識ということをかかげさせていただきました。その第一が青年向けのアンケート調査の一節からというふうに、書いてございます。その枠どりのところがございますが、これは最近、一昨年くらいになりますか、私がこういう形のものを考えまして、調査を試みているものです。調査結果は、割合今日の青年のものの考え方がうまく現れるかなと思っているところでございます。数年前に亡くなりました武者小路実篤氏の言葉に、「君は君、吾は吾、されど仲良き」という言葉がございますが、それに触発されまして、それをヒントに、その枠のような形の問いと選択肢をつくってみたわけです。

問いは「あなたはいま友達と話しています。話の途中で、お互いの意見がぶつかりました。そこで、友達が言いました――「君は君、私は私」。それに対して、あなたも一言どうぞ。」ということで、四つの選択肢をもうけてみたわけです。これは相手の「君は君、私は私」という言葉に対して、実際に言うか、心の中で考えるかは別にしまして、第一は「まあほどほどに」という態度をとる場合、結局意見が行き詰まったときに、あなたはあなたよね、私は私よねというような状況に対して、どういう反応を示すかと言うことなんです。1が「まあほどほどに」という場合、2番目が「ではさようなら」という場合、3番目が「だけど仲良し」という、これが「されど仲良き」のもとの言葉に一番近いものだと思いますが、4番目が「だから仲良し」と。ちょっと実際の場面を想定してみていただきたいのです。そして皆さん方の若い方たちには、自己診断をしていただくとよろしいかと思いますが、つまりこのお互いの人間関係、あるいは簡単にいえば、付き合いということでよろしいんですが、それが行き詰まったとき、どういう対応を今日の若い人たちがとるかという、こういう問題です。行き詰まろうとどうしようと、また仲がいい場合にもほどほどにつきあうということを、処世訓、あるいは自分の生活態度のように考えていく場合と、それから展望が見えなくなると「ではさようなら」という、つまりそこでの人間関係を断ち切って自分の殻に閉じ込もってしまうような場合、「だけど仲良し」――「だけど」ということでそれにも関わらず、人間関係を続けていこう、友達であり続けようと努力するタイプ、あるいはあなたと私は違っているからこそ友達でありうるんだというような考え方、これは一般の青年の人たちに聞きまして結果を整理しますと、2番目のところに人間関係の意識の4，

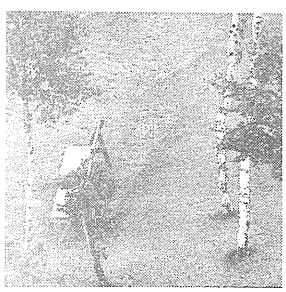
3，2，1システムというふうに書いておきましたが、だいたいこの1番「まあほどほどに」という回答が4割前後、それから2番目の「ではさようなら」というのが3割前後、3番目の「だけど仲良しなんだよ」というのが2割前後、それから一番下の「だから仲良しなんだ」というタイプというのが1割前後ぐらい、合計すると10割、100％になるわけです。全体がだいたい、4，3，2，1ぐらいの割合で分布するのかなというのが、私の今までの実験の結果なんです。そこで仮に、この1から4までに名称をつけまして、一つずつのタイプに分けてみました。型に分けてしまうというのは後でお話しますように、むしろ今日の青年のひとりひとりの全体像を捉えにくい場合がありますが、あえてグループ化しますと、「まあほどほどに」というのを人間関係希薄型というふうに仮に名づけてみました。お互いの付き合い、人間関係がかなり表面的である。どうしてももう一歩本音でお互いに入り込んでいけない、希薄なあるいは、表面的なところの人間関係の取り結びに終わっている、こういう様な場合ではないかというふうに思われます。

2番目の「ではさようなら」とは、事柄が複雑になったり、こんがらがったり、面倒になったりしてきますと、簡単にお互いに関係を断ち切って自分自身の中へもう一度はいり込んでしまう、というような、ある方の説では、昨年おきました宮崎勤事件のように、人間関係拒絶型というところに入るのではないかと言われております。実は宮崎事件が起こりまして、後に新聞に紹介されたものを読んだわけですが、彼があの事件を起こすに至る前に、家の中で自分の部屋にビデオをいっぱい持ちこんで、暇さえあれば閉じ込もってしまうというようなことを、かなり両親が心配していたようですね。なんとか彼を同世代の若い人たちの所へ引き出したい、そういう友達関係をつくらせたいということで、再三彼に、彼の住んでいた地域に、たまたま今では名前は古いのですが、地域青年団という地域の青年の集まりがありまして、その青年団にでも入ってみたらどうかということを勧めたようなんですが、彼はそのつど親の勧めを断わって、自分の部屋へ閉じ込もっていた。その理由は、そういう友達付き合いは苦手だとか、嫌いだとか、疲れるからとか、こういう事だったらしいのです。

ついでに話しますと、どうも私のつきあってる範囲のことかもしれませんが、最近の若者の間では、この「疲れる」という言葉が大変多く出まして、日常の挨拶用語になっているような気がするんですね。青年のサークル、グループ、あるいは青年団等でも、何かをしようという提案があると、動くと疲れるからやめようと、じゃあこんなことで話をしてみたらどうかと言いますと、考えると疲れるからやめようと、何をしても疲れるということが頻発される傾向がありまして、どうも私は心配になっているんです。青年諸君に向かっては、それは青年期疲労性症候群というふうに名付けまして、別名「疲れた病」と言ってるんですが、何をするにも疲れた疲れたという言葉が出てくる。

ただこの1番目の「まあほどほどに」という、なにするにもほどほどというタイプ、「ほどほど人生」などという言葉もマスコミに登場するようになってきましたが、何をするにもほどほどにというタイプの青年たちの中に、一面では2番目のように、何か起こったときに「ではさようなら」とはっきり言いきれるタイプですね、こういう人たちが、うらやましいという反応があります。これは少し気を付けておいていいかなというふうに思っているんですが、おそらく「ほどほどに」という言葉の中には、私ども大人の目からみますと、なにをするにも中途半端で、表面的で、関係が薄くてというふうに捉えがちなんですが、現代の社会風潮に対する、若干の抵抗意識のようなものも「ほどほどに」という場合にありうるような気がします。それはなにかと言いますと、一方ではよく言われますところの、現代の管理社会的な雰囲気ですね。この中にどうも完全にとけ込めない、そういうところへどっぷりつかるのも気が進まない、そうかといって真剣に人生を語ったりというようなそういう風潮にもついていけない、その中間のところで、おそらく試行錯誤をしているような、戸惑いを示しているような面もあるのではないかと思っているんです。これ自体詳しく分析したことはございませんが「ほどほどに」というのはなべて、全体に共通するフラットな、共通の対話だというふうには、必ずしも見られない。その中には、色々生い立ちの中での経験や、その他、今日の社会風潮に対するいろんな緊張関係も一定の限度では、見られるかなと。ですが表面に現れてきた限りで言えば、さよならとも言いきれない代わりに、なにか進んで探求しようということにもならない。こういうようなところかなというふうな気がいたします。

3番目の「だけど仲良し」というのは、これは出典の武者小路先生に敬意を表しまして、先生の道筋に合わせまして、人間関係探求型という名前をつけておきました。お互いの間に違いはあるけれど、「だけど」ですから、しかし異質なものであっても、それを認め合って、そこに何か共通点を見いだしていくというような、こういう考え方、あるいは人生態度というのは、今日の私どもの市民社会ではとっても大切なことでないかというふうに思うのですが、おそらく青年の中で、自ら何ほどか求めて、グループや、サークル活動や、青年団のような集団活動にはいり込んでいく青年の中には、この「だけど仲良し」という努力型の青年達が、少なからず見受けられるのではないかというふうに思うわけです。



4番目の「だから仲良し」という人間関係本質型というのは、あまりこなれない名称を仮につけてみたわけですが、つまりこれはおそらく、私ども日本人の場合にこれからの社会の展望の中で、高齢化、それから情報化と共に言われております、国際化という場合に、異質なものの中にむしろ積極的な共存、共同の芽を見つけていくという積極的なタイプ、あるいは人間関係というのが、今後ますます必要になっていくのではないかという思いから、あえて4番目に、

この選択肢をもうけてみたわけです。なるほどと言いましょうか、これは青年の意識に関する限りでは、反応が一番少ない部分です。1割いるか、いないかという、こんな程度のことだというふうに思いました。今日の青年の意識や雰囲気を摑む場合に、大人を含めまして、ある意味では日本人に共通の意識という事になるかも知れませんが、特に青年の世代にあっては、この異質なものに対する拒絶反応というのが、かなりあるのではないか。異質なものを受け入れない、同質のもので小さく固まってしまう。ですから一人ぼっちでいるとか、人間関係拒絶型のような、そういう状況でいるか、あるいは友達を得るという場合にも、それはかなり限られた同質的なタイプの中での気安い人間関係だけにとどまっていて、異質なものに積極的にぶつかっていって、そこで自分の人格の幅を広げていくんだという、こういうことにはなかなかなっていないようにも思います。

近年における青年の仲間集団ということでいいますと、よくいわれる言葉が二つありますが、一つは「車一台分の付き合い」という、つまり付き合いの幅が少数化している、少人数化しているという意味なんですが、車一台分ですから、せいぜい4，5人程度までは、仲間付き合いができるけれども、それ以上の範囲になると、なかなか仲間付き合いというのができない。最近よく教育委員会等で話題になりますことに新卒の学校の先生で、一か月経つか経たないかの内に、クラス運営に自信がもてなくてノイローゼになる先生がかなりおります。ひどい場合には、年に数件ですが、それで自殺に至るというケースもあります。その理由を訪ねていきますと、自分が大学を終わるまでの人生経験の中で、その車一台分くらいの、数人位までの友達関係というのは体験の中にあるのですが、一つのクラスを束ねていくような、相手の子供が30人，40人となると、途端に集団運営ができなくなる。つまり自分の経験にもない新しい事態にぶつかって、戸惑いをみせるというようなことが言われております。

車一台分の仲間作りですとか、あるいは手で触れる範囲の仲間作り、これは極めて感覚的な、つまりお互いに友達同志だよという場合に、手を延ばせば届く範囲の仲間づくりしかできないとこういうようなことがよく言われております。しかも車一台分の仲間はやっと作りえても、それで車に乗ってどこかへドライブして喫茶店にはいるわけですが、戯画的、漫画風に言えば、喫茶店に入ってせっかく一つのテーブルを囲んでコーヒーを飲む場合にも、およそ会話というものがみられない。喫茶店に入りますと、われがちに数冊の漫画を抱えてテーブルへつきまして、後はお互い数十分黙りこくったまま目の前に友達がいながら黙っておれるというこの「忍耐力」は、大変なものだというふうに私などは逆に思うのです。そして、黙って漫画の本を、私はあえて読むという言葉を使わずに、目を走らせてるというふうに言うのですが、じっくりと文字を読んでいるわけではないんですね。昔、私どもの小さい頃には、手製のものですが人の顔などを描きまして少しづつ顔の表情を変えていく絵を二十枚くらい描き、

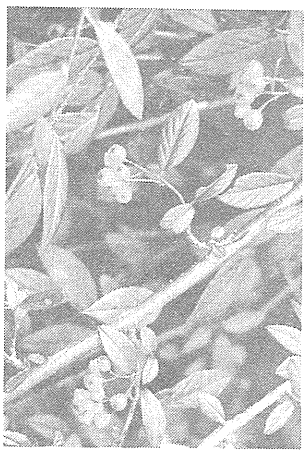
これを束ねてパラパラとやりますと、人がいかにも動いているようなですね。ああいう感覚で漫画の本を見て、およそ一冊の本を、どうでしょうか、２，３分で、読んだと称するわけなんですが、これが実は彼らの思考様式にも関係がしてまいります。こういうような状況が一方ではあります。ですが、しかし仮に２割なり、１割とはいえ、やっぱり友達や仲間を求めて、なんとかしたいと考えている青年達もいることは確かなんです。実は、先ほど話しましたように、宮崎青年が、両親から青年団へでも入って友達を作ってみたらどうかと言われたというお話をしましたが、いま全国ずいぶん数は少なくなってきましたが、それでも各地域で青年団活動をしております青年達を集めますと全国で二十万人くらいはおります。この青年団活動をしております全国の協議会に、日本青年団協議会というのがございます。日青協というふうに略称してるんですが、この日本青年団協議会で、宮崎事件の記事が東京地方のある新聞に載りましてから、急遽座談会を組みました。この宮崎事件から何を学ぶかということなんですが、そこで私も司会を頼まれて座談会を行ったのですが、どうも始めのうちはそこに出席していた青年達の言い分は、自分はここに言うような「ではさようなら」型、つまり人間関係拒絶型ではない、適当に友達が欲しいし、また友達と一緒に青年団活動をしているから、自分は間違っても宮崎のようなことにはならないだろうというふうに考えて、そこでもう安心しきっているんですね。

そこで私は、青年の人たちに、宮崎的なタイプというのは、まったく一人の青年の頭のてっぺんから足の先まで全人格を包んで100％宮崎的だとか、宮崎的でないという、こういうことが言えるだろうかという問題を投げかけてみたんです。ですから、その新聞の見出しも「我が内なる宮崎事件」というふうにタイトルをつけてみたんですが、やっぱり青年団活動で頑張ってますとか、あるいはグループやサークル活動をやってますと言う青年達の中にも、何か自分が行っている集団活動や、仲間関係の中で、いろいろな困難な事態が起こってきた時には、意外とそこをもう一つ乗り越えてなんとかということではなしに、こんな面倒くさい事だったらもうしばらくは一人でいる方がいいなあというような傾向が、まま見られることなんですね。どうも困難なことを回避する、困難な事態の前でＵターン現象を起こしてしまうというような、そういう事例はいくらでもあります。やっぱり私たちの心の中には何割方かは、場合によっては宮崎型な、人間関係拒絶的な、そういう傾向だってありえて、しかしそうでない場合は、仲間と一緒に頑張っていきましょうと通しているんだけれども、それだけがいつも100％私の場合は身についてますから大丈夫です、なんて言えることはまずありえないだろうと思います。

人間の心の中には、言ってみれば１から４までのいろいろなタイプが共存していて、しかしその時々にどれだけ青年が、積極的に人生を歩んで行くか、また仲間の支えや、自分の努力があるか、ないかというあたりの所で、結局その

人の生活態度や意識が決っていくのではないかと思います。そういう意味では、現代青年の意識ということを考えます場合に、先にお話しましたようにタイプを設定して、一人一人の青年をどれかはめてしまうということは、むしろあまり現実的でもないし、今後の具体的な展望も見えないだろうと思います。それぞれの青年にそれぞれの局面がなんぼかありえて、それらが攻めぎ合ながら、今日の青年の実際の意識や、態度をその時々に決めていってるというふうにとった方が、研究の方法としても積極的なものをもっているのではないかと考えております。

1の3に課題設定というふうに書いておきましたが、まず皆さんご承知のように、ここ数年の間をとりましても、今日の青年達をさして、あれやこれや、いろいろと呼んでいる言葉がたくさん出ては消え、出ては消えしているわけです。私も気のつく限りでざっと追ってみますと、ここにあるような新語、流行語の系譜がみられるのではないかというふうに思います。一番初期の頃、と言いましても数年前の事ですが、学校関係、中学、高校の先生を中心に三無主義とか五無主義というような言葉が、よく使われた時代がございました。無責任とか、無感動とか、無なになにという言葉を集めて、三無主義とか五無主義とか言っていたわけですが、そういう言葉が流行した背景には、どうも中学生、高校生などを中心とします青年達の間に、一つは感受性が欠如してきているのではないか。無感動という言葉で示されますように、なんか人との会話なり、人間関係なりを通じてお互いに感動を覚える、与え合うというような事が乏しくなってきているのではないか。これも先ほどの言葉で言えば、「まあほどほどに」という言葉が背景にあるのかも知れません。



それからもう一つは、共同性の欠如ということが問題になってきたのではないか。これはごく最近、私が考えております事ですが、たとえば社会学の古典的な系譜をひもときますと、集団論を展開します場合に、個人と集団という、この対比ということが一番ベースにあろうかと思います。しかし、現代の青年、あるいは少年まで含めて、青少年を見ていきます場合に、彼らが個人から集団へ、仲間へと展開していく過程の中で、いきなり個人か、集団かという二極対立として事柄を捉えていくというのは、どうも充分ではないんじゃないかなあと、その間に「共同」というカテゴリーを入れてみたらどうかということが、私の考えてるところです。つまり個人、共同、集団、というようなこういう捉え方ですが、この共同と言いますのは、今日の社会生活を行っていきます場合に、あえて青少年が自ら自覚的に仲間や集団というものを捉える場合に、この関係を結ぶむしろ一歩手前のところで、それとは自覚はしていないかも知れません。たとえば、かつては家庭の中で、あるいは地域の中で、いわば自然に培われてきたような、お互いの共通の生活規範のようなもの、たとえば、人に優しくするとか、下の子供は可愛がるものだとか、上の人にはなつくものだというようなものです。そういう共同という範疇をいれて、個人、共同、集団とい

う展開過程の中で、今日の青年達の感受性や、共同性の問題をつかんでみたらどうなるだろうかというのが、そのモチーフになっているわけです。

初期の頃、三無主義、五無主義ということがありました。それから二番目に、これは三無主義、五無主義と並びまして、三語族という言葉がよくはやりました。これも中学生、高校生を中心に、この三語と言うのは文字通り三つの言葉の事なんですが、たとえば男子の中高生でしたら、母親との人間関係を取り結ぶ場合に、「飯」という言葉と、「金」という言葉と、「風呂」という言葉の三つだけで、人間関係を取り結んでいく。それ以外の人間関係を取り結べないという、その「飯」、「金」、「風呂」というこういう言葉、語感、語調も含めてなんですが、そうような形の人間関係です。あるいは女子の中高生の場合では、これは皆さんも記憶があると思いますが、「嘘」、「本当」、「かっこいい」、あるいは「かわいい」という、この三つだけで友達関係がなりたつという、そしてそれ以外の言語は不用だとこういうものです。人間というのは、使う言葉が乏しくなれば、あるいは少なくなればなるほど、その使う言葉には、最大限の感情を込めるものだという説を述べられた方がいらっしゃいますが、確かに聞いてみますと、「嘘」、「本当」、「かわいい」という言葉には、最大限の感情をあの独特のイントネーションの中に込めて使っているようです。「嘘」は「うっそー」とこう詰めて語尾をあげる。「本当」もこうなる。「かわいい」は「か」と「わ」の間に促音便つを入れる。「かわいい」ではなくて、「かっわいい」と言わなければ感情が表現されない。言語というものを通じての、文化のありようを示す状況、その衰退を嘆かざるえないような風潮の現れで、これが三語族という青年もしくは青少年に与えられた呼称でした。

それから最近のところでは、「青い鳥症候群」ですね。それからこれはアメリカの精神学者のダン・カイリー（訳は慶応大学の小此木啓吾氏）ですが、「ピーターパン・シンドローム」。この「青い鳥症候群」や「ピーターパン・シンドローム」というのは、特に後者は「大人になりたくない少年の話」というサブタイトルがついておりますように、青少年期における自立性の欠如の指摘、共同性や社会性も身につかず大人になりきれないという、別の言葉でいいますと、いわゆる「アイデンティティなきモラトリアム」というものです。あるいはむしろ、「アイデンティティなき」と言うよりは、モラトリアムそれ自体を生涯続けていくことに、一定の人生態度や処世のあり方を見いだしていく、いわばその時その時の状況に合わせて、カメレオンのように自分を変えていくことで状況に対応していくような、そういうことにも通じていくことかもしれません。

それから、「エーリアンズ」「異邦人」でありますとか、もっとすすみましては「異星人」と言うような用語。これは、もっぱら大人の世代からみた青年世代のあり方だと思いますが、どうしても価値観の相違によって、世代間に断絶が生まれてしまう。あるいは、大人の価値観からすれば、青年というものが

どうしても理解できないというような形のものが、主として大人の側から主張されました。それから、「新人類」という言葉も私どもに耳新しい言葉です。

これは二年前か、三年前に出てきた言葉なんですが、新人類というのは別名で新感覚的擬音族というふうにも呼称されていました。これが先ほどの漫画本に関係してきます。これは中日新聞のある時の社説に載ったものなんですが、新人類という言葉が出始めたときに、ある職場の風景が描かれていました。新入社員の女子社員と課長さんとの会話なんです。課長さんがその女子社員から出された起案書を見ましたら、いろいろと文章上適切でないところがあった。それでその女子社員を呼んで注意を与えたわけです。「君ここは、こうやって……」と注意しはじめると、その女子社員は「ハイハイ」という返事をしたと言うんです。昔、私どもの小さい頃は、「二つ返事はせぬより悪い」と言ってしつけられてきました。返事はただ一回「はい」と言えと。ですが最近では、返事をしない青少年が増えてきてますので、私は「二つ返事はせぬより悪い」という諺は返上して、「二つ返事でもする方がよい」というふうに思っております。さらに課長さんが「これはこうやって、あれはこうやって」というふうに、一つ一つ具体的にトレーニングを始めましたところ、今度はその社員が「シクシク」という発音をしたというのですで黙って「ここはこうやって、ああやって」と続けますと、さらに今度は「メソメソ」と言ったというのです。何だろうと思って顔を見ましたら、顔は普通のポーカーフェイスをしているけれども、言葉では「シクシク」とか「メソメソ」という、つまり私は泣いているという意志表示なんですね。悲しくて、それで本当に泣かずに、擬音で発声するところに特徴があるんです。課長さんが呆れてしまいまして「今日のところはいいから席へ戻りなさい」と言いましたら、その女子社員の人は、「スタスタ」という言葉を残して帰って行ったというんです。「スタスタ」というのは歩く擬音なんです。なるほどなあと思いました。そう言われてみますと、今日の子供達や青年達が漫画の本を読みます時に、一つ一つ文字を読んでいくのではなくて、「流し読み」「飛ばし読み」をしていく。いやむしろ、「読む」ことは止めて、映像としての画面だけをつないでいく。その意味では、画面に描かれたさまざまな擬音をも、一つの映像として捉えてしまう。そういう物事の捉え方に問題があると思います。

だいぶ最近になりますと、「お宅族」という言葉がはやってきました。特にあの宮崎事件がおきましたときは、宮崎もお宅族の一人だと言われておりました。お宅族と言いますのは、青少年の匿名化と人間関係の希薄化という点で象徴的な言葉だと思います。これはもっぱら、自分の部屋に閉じ込もって、ビデオを愛好する世界での青年達、それからビデオではありませんが、パソコンなどをいじるような子供達の間に流行っている言葉のようなんですが、たとえばそういう青少年が、ビデオショップやパソコンやさんで、顔を合わせましても、

彼らは決してお互いの実名を知ろうとはしないし、また実名で呼ぼうともしない。常に相手を「お宅」、「お宅」という言葉で呼んでいる。「お宅はどうですか」とか「お宅はこういう場合どうしますか」と、「お宅」という言葉ですべてかたづけて、お互いにどこの誰とも解らぬ、その場限りでの、瞬間的な人間関係を結んではまたこわしていく。こういうところから、青少年の間の匿名的な瞬間的な付き合いを称して、お宅族という言葉がはやりました。

それから、これは去年の今ごろ、「ニューヨーク・タイムズ」で特集されて、日本に翻訳され輸入されたものなんですが、「カウチポテト族」ですね。カウチと言うのは、ご承知のようにソファーベッド式の長椅子です。それからポテトはポテトチップのポテトです。青年達の間に、特に大都会に住む匿名青年達の間に、学校や仕事が終わればもうどこへも寄り道をせずに、まっすぐに自分の家、正確にいうと自分の家ではなくて自分の部屋へ戻る。これはけっこう30代の世代にもそういう傾向がみられるようです。かつては同僚達と一杯飲み屋さんへ入ったり、あるいは職場の付き合いでゴルフなどに行った、そういう経験をもつほどの人たちでも、ある日突然に自分の部屋の中へ閉じ込もってしまう。家の中でも家族共通のエリアであります居間とか、玄関とか、家族共通の空間にはまるで関心を示さない。そこがどれだけ汚れていようと構わない。その代わり、自分にあてがわれた部屋の中だけは、神経質なぐらいに磨きあげる。だいたい日本の青年が使用している部屋ですと、どんな大きくても半径5メートルぐらいの円にすっぽり入ってしまいますので、カウチポテト族というのは別名「半径5メートル以内人間」というふうな呼称もあるわけですが、この半径5メートル以内の自分の部屋だけは、異常に飾りたてるというんです。飾る場所は、もっぱら自分のテーブルの上、それから下宿をしております場合には、風呂及びトイレ、それから自分のベッドの周辺、つまり一つの部屋の中で、基本的な生活の場面だけは磨き上げ、凝ったものを買って来る。そして、仕事や学業が終わってまっすぐに帰りますと、すぐそのソファーベッドに横になり、テレビでビデオをかけて、楽しむ。で、ついでにテーブルの上にポテトチップをおいてそれをポリポリかじりながら、カウチに横たわって見ておりますので、カウチポテト族という名前がついたのです。

その場合に、彼らは先ほどもお話しましたように、「疲れる」ということが一番自分にとって煩わしいことだと思う。逆にいえば、「快適さ」こそ最も自分の生活で価値あるものだと思う。したがって、レンタルビデオショップで借りてくるビデオも、見て疲れるようなものは借りてこない。劇映画ですとか、ニュース性のあるものですとか、脳細胞を刺激するものは疲れますので、なるべく疲れないものを借りてくる。カウチポテト族が、どういうものをレンタルビデオやさんで一番借り出すかと言いますと、たとえば私どもの周りには壁があります。壁には、本物の塗り壁もあれば、プリントや布張り壁もあります。最近では、いろいろと壁に幾何模様や線を入れたり、いろんな工夫を凝らすよ

うになりました。で、そのビデオ用のカメラを専門に撮っております方が新聞で述べておりますが、自分が一年春夏秋冬を通じて富士山の周りを回って、朝焼け、夕焼けの一瞬を撮ったようなビデオは誰も借りてくれない。今のシーズンもそうですが、ひと冬寒さに凍えながら、北海道の原野で丹頂鶴を追って行くような、そういうビデオも誰も借りてくれない。自分がある時、なんの気なしに壁紙をワンカット十数秒づつ意味もなく撮ってつないだものが、一番借り出されたというのです。ちょっと光景を想像してみていただきたいんですが、こうやってビデオを見ていますと、壁紙が次から次へ出ては消えていくわけですね。そういうものを見ながら、やがて時間がくると眠りにつくというわけです。つまり意味のないものが好きだというよりは、これは先ほど言いましたように疲れることを拒否するというこういう事かも知れませんが、そこまで人間の孤独というものは行き着くところまで行き着くんだという、こういうお話です。

カウチポテト族をもっと進めたものだと思いますが、これはごく二月か、三月ほど前ですが、「ネタッキー族」という言葉が登場してきております。これはある雑誌の編集部が命名した言葉なんですが、読んで解りますように、「寝たっきり」という言葉をもじって、寝たっきり族という意味でのネタッキー族と言うことなんです。今の青年達は、人間関係に疲れ、小此木啓吾氏の言葉を借りて言えば「孤独感なき孤独」と言いましょうか、孤独感すら忘れてしまった青年達はそうしようと思えば24時間誰とも人間関係を取り結ばずに、生きていくことができるような社会になったといわれています。今や朝起きたてでも結構ですし、夜寝る前でもいいですが、24時間体制の出前方式ができてきています。しかもそれは、モーニングセットを始め和食、洋食、中華料理なんでも注文すれば30分以内に届けてくれる。ですから出前というのは寿司さんとか、お蕎麦屋さんというような観念というのは古くなっています。何でもどんな料理でも24時間届けてくれる。それから本屋さんでは、これは東京でも大手の方だと思いますが、三省堂さんを始め、本雑誌の類の出前を始めてるようですね。これも注文すれば、週刊誌から単行本にいたるまで届けてくれる。それからクリーニング屋さんなどとの関係も随分と様変わりしてきまして、それでも今日大半のご家庭ではクリーニング屋さんに色々持って行っていただく場合に、まず玄関のブザーが鳴って玄関に出て行くとクリーニング屋さんで、これをお願いしますと二言三言ですね会話を交わして、それでクリーニング屋さんの業務がはじまるということだと思います。しかし、ネタッキー族の場合には、クリーニング屋さんとの特約によって、特殊なケースが契約者の元へ届けられてくる。青年は着古した物をどんどんそこへ投げ捨てていって、一杯になったら黙って、アパートなりマンションの玄関に出しておくと、クリーニング屋さんが持って行ってそれをその日の夕方には届けてくれる。届けてくれる場合にも黙ってそこへ置いて行く。つまり一言もしゃべらずに、会話をせずに過ごしていけると

いうことですね。こういうようなネタッキー族という言葉に代表されますように、孤独感なき孤独が徹底的に進行するような場面というのも、今後の情報化、あるいは技術の進歩いかんでは、かなりの程度まで進むのではないかと、こんなことまで言われているわけです。

いろんな新語や流行語を話してきましたが、次に、本格的な課題設定にはなりませんが、それらの新語、流行語に現れているもの、あるいは背景を探ってみると、どんな問題点が浮かび上がって来るだろうかということを整理しておきました。まず、一つ目には、今日の青年を見る場合に、青年達の幼少年期からの生い立ちの問題にも関わっていくことが大切だということです。これが今日の青年期を巡る生涯学習のあり方にも結び付いて来ることになります。先ほどお話しましたように、感受性・共同性との衰退や欠如がみられてきている。

ですから、たとえば孤独感なき孤独、実際には孤立し、孤独であるにも関わらず、自らは孤独ということを感じていないということに見られるように、これはある意味では、人間にとっての本性でもある感受性が、かなりの程度に衰退し、あるいは欠如してきている現れかなというような気もするのです。それから自立性の欠如と匿名化・孤立化こういう状況です。「ほどほどに」あるいは「ではさようなら」という様なところにみられるそういう問題。それから人間関係希薄化と拒絶化の進行、以上の感受性・共同性の衰退・欠如ですとか、自立性の欠如と匿名化・孤立化の進行ということを考えてみますと、この人間関係というものがますます希薄化していく、こういう状況がみられるように思われます。今の事態をこのまま放置しておけば、こういう希薄化というのは、一層進んで行くのではないかということが予測されます。

で、そのベースにあります問題点ということで、同じ様なことなんですが三つのことを挙げておきました。一つは同質的なものと異質的なもの。先ほど話しましたように、同質的なものには簡単に共感を示し、それと自分との間に関係を取り結びますが、異質のものにはなかなか関係を結ぶことができない。むしろ拒絶的な方向に立ち向かってしまうというこういう問題。それから、区別と関連ということでいいますと、これも現代の青年の中に、少なからず見られる傾向として、あの人と私はこういう所が違うんだという区別を好むといいますか、そちらの面が先行してしまって、あの人と私とはどういう共通性があるのかという関連の面を突き詰めて行く生活態度がかなり弱くなってきているのではないか。ですからたとえば、友達との付き合いをする場合にも、二、三回顔を合わせれば、すぐその人が解っちゃったような気になる。あるいは見えてしまったような気になる。これは付き合いというものが、表面的なもの、あるいは姿・形の違いの確認だけに終わってしまって、姿・形が違うにも関わらず、その中身、内容としての共通性をどう探って行くかというような、そういう対応というのがかなり弱くなってきているのではないか。

もっと一般的な言葉で言いますと、これは今日の社会風潮とも関係すると思いますが、分化の側面が強く出てきて、あるいは強調されて、統合という面が非常に弱くなってきている。世の中が一般に、専門的に機能化していけばいくほど、この分化の側面というのは進むと思いますが、しかし分化が進めば進むほど、他面ではそれらのものを集めた統合的な視点が、大切だというふうに思われますが、この統合的な視点というのが、これはある意味では大人の世代を含めてのことかも知れませんが、段々弱くなてきているように思われます。たとえば将来の日本を予測します場合に、時代的な特徴として、先ほどもお話しましたが、情報化・国際化・高齢化というようなことを言います。それでは情報化と高齢化と国際化という三つの側面を統合した場合に、こういう形のものがなかなか見えてこない。これは同じように、たとえば今日文部省でもそうですし、通産省でもそうなんですが、あるいは自治省でもそうですが、コミュニティというものの見直し、地域社会の結合なり連帯をもう一度どうやって取り戻して行くかということが大変話題になってるんですが、私共の日常感覚では、地域というものがすでに家庭や学校や職場と並んで、もう一つこの世の中には、地域というものがあるような感覚になってきております。ですから、よく青少年の健全育成などをいいます場合に、たとえば「家庭や学校や職場や地域が協力して」と言うふうに、家庭と学校と職場と地域の間を、「や」という並列の助詞で結んでいくわけですね。これはあきらかに私どもの意識の中で、今日では地域というものが、家庭や学校や職場と横に並んであるものというふうな理解の仕方になってきているからだと思います。私どもの伝統的な地域観というものは、そうではなかったように思います。地域というものは、家庭や学校や職場と並んであるのではなくて、家庭や学校や職場を包んでいるものだという、これが実は伝統的な地域観でなかったか。つまり、地域というものは他のものに対して、並列概念ではなくて、包括概念もしくは統合概念であったはずです。たとえば、昔からの諺なんですが「親はなくても子は育つ」という場合に、これはあきらかに子育てというものに対する地域の強力な統合的な役割があったから、そうした諺が生まれたと思うのです。今日では家庭からはぐれてしまった子供達というのは、自動的に地域の懐の中に包み込まれるかというとそうではないわけです。地域の随所にみられる真空地帯といいましょうか、エアーポケットの中で非行化し、問題化していく。これはあきらかに地域が、家庭や学校や職場やそういった他の人間生活の場を包み込まなくなっているということだと思います。こういうことも、これから地域やコミュニティということを考えていく場合に、大きな問題となるように思います。並列概念から、包括概念へというのが、私の考えていることなんですが、現代社会というのはともすれば、あらゆる機能が並列化していってしまって、その中で何か一つ包括的なものの中で、全体がうまくかみ合い機能し合っているという見方が、段々乏しくなってしまうのかなという気がいたします。

現代青年と生涯学習ということを考えます場合にも、いろんな面で関わってきているのではないかと思われます。以下少し、端折りながらお話をしてまいりたいと思いますが、まず第一に、現代青年と生涯学習ということを考えます場合に、問題の所在ということで、かつてわが国で生涯学習というものに触れた代表的なものをここでおさらいしてみました。別紙の１、２、わが国の生涯学習観ということで、資料１から３までを用意させていただきました。資料の１は、1971年（昭和46年）のことですが、「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」ということで、国の社会教育審議会が、文部大臣にあてた答申です。およそわが国の答申や建議の類では、この1971年の「社会教育のあり方について」の中で、初めて生涯学習（生涯教育）という言葉が出てきたように思われます。資料２は、それから丁度10年経ちました1981年、これは国の中央教育審議会、同じく文部大臣の諮問機関ですが、中央教育審議会の答申で、これは文字通り「生涯教育について」という答申がなされました。それから近年のところでは臨時教育審議会の答申で、私の手元に第四次答申がございませんでしたので、一次から三次まで目を通してきましたが、四次答申でも基本的に同じです。これらの答申の中で「生涯学習」という言葉がうたわれております。

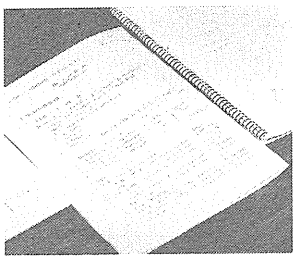
前のレジメへ戻っていただきますと、生涯学習というのは、いったい何だろうかということを考えます場合に、そこに理念というふうなことを書いておきましたが、生涯学習というのは何かという理念を真正面から取り上げたというのは意外に少ないようです。言葉では、そこに書いておきましたように「生涯にわたる」、これが社教審の答申の言葉です。資料の１です。それから「生涯にわたって行う」、これが中央教育審議会の言葉です。３番目は「生涯を通じて行われる」、これが臨教審の言葉です。そういう学習が生涯学習だと、それぞれ言っております。少しずつ言葉は違いますが、中身は同じものなんですね。生涯にわたって行われるというこういうことなんです。ただ、ここで予め論点を示しておきますと、生涯にわたるとか、生涯にわたって行われるというのは、もっぱらこれは学習期間論、学習の期間として述べていることであって、学習の内容として述べていることではない。つまり人間が、それぞれの個体が、生涯を通じて、幼児期には幼児期に、少年期には少年期に、青年期には青年期に、そして高齢期には高齢期に、生涯のそれぞれの各時期に学習というものが必要なんだという、そういう意味での生涯にわたるという学習期間のあるいは学習段階の問題を述べているだけです。たとえば青年期の学習において、高齢者問題あるは高齢化社会問題を積極的に取り上げていく、また、少年期に自分が大きくなったらどういう人間になっていくのかというような、言わば縦の線ですね、そういう意味で「生涯にわたる」という問題意識がここでは欠けているように思います。30代、40代の壮年期や、50代の向老期になりますと、自分の高齢期を含めた生涯の見通しをどうして行くんだという、こういう学習内容

の射程のとりかたという問題が「生涯にわたる」ということの中には入っていないということです。

これは大きな問題なんです。最近、これはもっぱら女性の方から男性の人たちへ、半ばのやゆと愛情を込めて贈られている言葉ですが、40代男性は「働き蜂」、50代の男性は「粗大ゴミ」、60過ぎれば「濡れ落葉」という、こういう呼称が与えられているんです。落葉は乾いていて、風が吹けばどこかへ飛んで行きますから潔いのですが、濡れ落葉というのは、掃いても掃いてもくっついてはなれないというんです。働き蜂から粗大ゴミへ、そして濡れ落葉へということで実際にそういう言葉が使われるというのは、ある程度の実態があるからだと思います。私が名古屋市の教育委員会でお付き合いしている限りでも、いろんな社会教育センターでお会いする向老期の方たち、あるいは高齢期に入ったばかりの方たち、特に男の方たちなんですが、定年になるまでそれこそがむしゃらに働いてきて、その間に地域のお付き合いというのはほとんどなかった。隣近所の方たちとも目と目が合えば顔を合わせる程度で、町中でも知り合いの後ろ姿を見たら、その人と目が合わないように避けて通るような生活を今までしてきた。やがて定年になった。翌日から何をどうしていっていいかさっぱり解らない。こういう方に時々ぶつかります。一番自分の生活の拠点である近隣地域でのお付き合いというものがないものですから、たまにかつての同僚と月に一回なり、年に一回なりお付き合いとするということはありえても、日常生活の中では行動半径が零に等しくなってしまう。こういう状況、これを奥さんの方からみますと、女性の方たちは、自らのグループ活動や、生きがいを求めて元気でいらっしゃるんですが、やっぱり家を出て来るときに、自分の夫をどうやって宥めて出て来るか一苦労するという話を聞きます。そういう様な事態にならないためにも、生涯学習の中に縦線を入れて考えて行きたいというのは、青年期の学習だけでなく、生涯のどんな時期でも今後の生涯学習に必要なことかなというふうに思います。

ですから、問題の所在の中の（1）従来のわが国の生涯学習観はどういうことを言ってきたかといいますと、生涯の各時期に応じる学習が必要だと、あるいは人生の各段階の要請に応える学習、これを生涯学習ではやっていくんだと、こういうことなんです。資料1の、文章を読めば大変よく解るのですが、生涯学習は何かといいますと、人々が生涯の各時期にいかなる問題に直面し、その問題解決のためにいかなる学習を必要とするか、これに対応していくのが生涯学習だといってるんです。簡単にいいますと、今まで考えられてきた生涯学習というのは、人生の、生涯のそれぞれの時期における生活課題解決学習だということなんです。青年期には青年期を過ごすために、いろんな生活課題にぶつかるだろう。その問題を解決していくのが青年期における生涯学習だと、高齢期には高齢になると、色々と高齢期の問題にぶつかるだろう。その問題を解決していくのが高齢期における生涯学習だというふうに述べられているわけです

ね。従いまして、それは生活課題解決学習ではありえても、生活課題設定学習ではない。たとえば青年期の学習の中に、５年後なり10年後なりにどういう問題にぶつかるだろうかということを予測し、それを青年期に積極的に課題を立て、その問題について考え、そして実際に自分が壮年期に至っても、その時になって慌てふためかないような事前の準備教育という視点は、あまり入ってきてないのが率直なところです。そういう学習のあり方を私は別の言葉で「生涯輪切り学習」と呼んでいます。人間の生涯を幼年期、少年期、青年期、壮年期、高齢期というふうに横に切ってしまいまして、その時々にぶつかる問題をその時々に解決して行きましょうという生涯輪切り学習になってしまいはしないのか、あるいはあえていえば、それは高齢期の問題は高齢期になって考えましょうということですから泥縄式の学習になりはしないのか、ということが一番心配になっている点です。



そこで１の（２）の青年版生涯学習の現状というところを見ますと、やっぱり青年期の、あるいは青年を対象とする学習というのは、世代別のその日暮し学習、あるいは世代別の生涯輪切り学習になっているというのが実状です。その典型的な事例をとりますと、今日たとえば情報化とか、国際化とか、高齢化という問題、先程来述べてきておりますが、青年の中で三つの今後の社会展望につきまして、一番入りにくい話題というのが、いわゆる高齢化社会問題の学習なんです。高齢化社会問題といいますと、今日の青年の大半はそれはイコール高齢者問題ととらえます。本当は高齢化社会問題というのは、高齢者問題だけでなく、その高齢者を包み込んでいる壮年層の問題でもあり、青年層の問題でもありうるし、なければいけないわけですが、高齢化社会問題＝高齢者問題というふうにとらえてしまいます。そうしますと、特徴的なことは、青年の人たちに高齢化社会という問題を話始めますと、青年の人たちは高齢化社会って何だろうと考えるわけですが、その時は必ず天井の蛍光灯や何か上を見て考えたり、窓の外を見て高齢化社会って何だろうとこういう目付きをするんです。私は人間がものを考えます時に、よそ事、ひと事、他人事として考える場合には、必ず目線を遠くに向けて考える。自分事として考える場合には、必ず目線を目の前の机の上に落とすというふうにみているのですが、青年の人たちに高齢化社会問題といいましても、高齢化社会ってなんだろうって下を向く青年は珍しいんです。皆遠くを向きます。事実話を聞きますと、高齢化社会というのは私の父親の問題かなとか、隣のおばあちゃんの話かなとか、地域のおじいさんの話かなと、こういうことになるわけです。

そこで、私はまわりくどい手法をとるわけですが、個人における生涯という問題をとりだしまして、たとえば青年の人たちに、日本の将来人口予測の話をします。厚生省の人口問題研究所、あるいは日大の人口研究所で、ほぼ同じ予測をしておりますが、わが国の高齢化社会がピークに達する2021年、この時に65歳以上の高齢者の割合はだいたい23％から24％代に突入するんではないかと

いわれております。23,4%というのは簡単にいいますと、4人にひとりということなんですね。4人にひとりが65歳以上になる。したがって、60歳以上とったらもっと多人数になるはずです。65歳以上でも約4人にひとりという、こういうイメージを与えて、後は単純な算術計算をしてもらいます。たとえば2021年というのは今から何年後か、単純な計算ですから31年と出てきます。2021年に高齢者という年齢基準の出発点である65歳に達する人は、今何歳の人かと計算してもらいます。と65から31をひきますと34歳の人ということになります。いま34歳の人が65歳になるときに、わが国の高齢化社会はピークに達するだろうとこういいうことが予想されるわけです。20代の青年諸君は、ほっとして胸をなでおろします。30代でなくでよかったと、そこで最後のだめ押しをします。2021年以降は、高齢化社会のピークに達した線がちっとも落ちてこない、横ばいなんだと。つまり今日の34歳以下の人が、高齢者になるときは、のきなみ4人にひとりが高齢者なんだと。したがって高齢化社会というのは、その意味では青年問題と思わないですかという問いを出すと、初めてなるほど高齢化社会というのは、自分達にも関係してくる問題かなということを、解り始めてくれるようです。

ところが、残念ながら今日の青年教育なり、青年の学習の中でそういう視点で、教材を集めたり、カリキュラムを組んだりということは、正直いってあまり多くありません。まだそれは必要課題として開発されたばかり、青年の人たちもそういうことに自ら関心を持つまでには至っておりません。今なにやりたいかということで言えば、つまり要求課題でいえば、遊びたいとか、スポーツをやりたいとかこういうことになるわけですが、その青年の人たちが希望し、要求する課題を一方では大切にしながら、同時に他方では、やっぱり自らがやがては高齢者になっていく、そして高齢者になったときに、4人にひとりだといって愕然としないように、今からその準備をしてもらっていくという意味では、まさに青年期において自らの高齢期を展望するような学習、そういう課題設定をして、少なくとも問題点を整理して、少しづつ考えていくような生涯学習のあり方ができないだろうか。これが今、私が青年期の生涯学習と言うことで一番考えていることです。

それに先ほどお話しましたように、今日の青年期において、青年が青年期を充実することをなかなかなしえない、充分な人間関係を展開できない。それで今度は、青年たちの過去へさかのぼっていく必要があります。彼らはいったいどういう生い立ちをしてきたのかなということを検討してみれば、そこで先ほどお話してきたような感受性、共同性の欠如という、あるいは衰退という問題が出てきます。感受性、共同性の問題などといいますのは、今日の青年問題から逆算してそこへぶつかれば、それは今日の幼少年期の課題にも一方ではなりますが、しかしそうかといって、今日の青年に人たちにおいては、彼らは小さい頃に、感受性と共同性を身につけることが、充分でなかったからもうそれは

しようがない。その面は、欠けたままの世代でいくより仕方がないというふうに、言っているわけにもいきません。不充分かも知れませんが、青年期のできるだけ入り口のところで、そういった共同性や感受性というものを大至急取り戻していかなければいけないという学習課題もありうるのではないか。これは、私の考えてるところですが、青年期の学習問題ということで考えた青年期というのを15歳から、従来の文部行政では24歳で切っておりますが、これを５才延長して29歳までと捉えることができないだろうか。これは先ほどお話しましたように、一方ではモラトリアムの延長とか、もう一つアイデンティティへ向かっての青年たちの自らの努力、あるいは現実社会のぶつかり合いというものを、教育論・学習論の視点でみていく場合には、20代の後半といえどもその学習対象の中に入ってくるのではないか。そう考えまして、15歳から19歳までを青年前期と考え、20歳から24歳までを青年中期ととらえ、25歳から29歳までを青年後期というふうに名付けてみたいと思います。その上で私は、青年前期の学習課題というのは、10代の内に、感受性、共同性というものをどれだけ取り戻すことができるか。あるいは欠如してるとすれば、新たにそれをどれだけ身につけていくことができるかという、そこが20代への進み方の一つの境目になるのではないか。そういう意味でいえば、10代の後半の青年といえども個体差は色々あるわけですから、自覚という意味での社会性を身に付けていくこともちろんありますし、大切なことには違いありませんが、先ほど言いましたような意味でいえば、10代の後半というのは、社会性を身につけるということを言う前に、それを学習カリキュラムの焦点にすえる前に、共同性ということを、学習論ないしは、学習カリキュラム論の焦点にすえて、10代後半の青年層における学習活動、あるいは集団活動のようなものを展開していくことが、今後必要になるのではないかということを考えています。

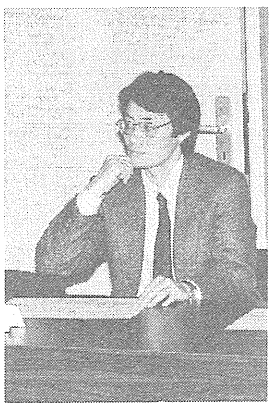
右側のレジメの一番下のところに、まとめのようなものを書いておきました。青年教育と生涯学習試論というふうに書いてございますが、生涯学習というものの考え方には、縦軸＝歴史軸の面と横軸＝社会軸の面があって、これを統合して考えることが必要です。別紙の２に、ちょっと図を描いておきました。下の横に、少年期から高齢期までを並べ、社会軸というふうに描いておきました。これを例えば、日本の社会を1990年なら90年という時点で横に切ったときに、その社会の中には、それぞれ固有の世代として、幼年から少年、青年、壮年、高齢者がいる。この社会に、それぞれの世代が固有の世代として存在しているということを示しています。縦の歴史軸、これはだれでも、それぞれの個人、個体が一定の平均寿命を与えられれば、必ず誰でも幼年期から少年期、青年期をへて壮年期、高齢期へと達していくということです。それぞれの個人がこういう経過をたどっていくというのを縦軸においてみました。そうしますと、生涯学習ということで、一人一人の市民なり、住民というもの、つまり生きた現実の人格というものをとらえてみます場合には、それぞれの時期に、横

軸と縦軸の両面から与えられた斜めの線に丸印で所々描いてありますが、それが実際には、ひとりの人が成長しながら、なおある時には社会的に、ある世代として存在しているということを示すことにはならないか。例えば、青年期というのを社会軸と歴史軸とでぶつけてみますと、1990年という現時点で、歴史的、社会的に与えられた生きた現実、人格としての青年達がいます。ちなみに、この時には高齢者の割合は11%、今年は11%をすぎていくんだと思いますが、こういう時期にあたっている。もう少したつと青年たちは、やがて壮年期の歴史的、社会的な人格としてこの世のなかにいることになる。西暦2000年、この時には壮年ですから、自分たちは該当しませんが、わが国の高齢者の割合は、15%を経過するだろうと予測されております。そして、今の青年たちが高齢期に達するとき、斜めの線の一番右上ですが、この2021年には23.4%が高齢者であることが想定されている。この時に、今日の青年たちが、高齢期の入口に接近していくことになる。

先ほど話しましたように、2021年は34歳の人なんです。これ以降、34歳以下の人たちが、どんどんと高齢期へと突入していくことになります。生涯学習の内容の中身のつかみ方というのは、その時々に与えられた社会軸、横軸ですね、自分が生活をしていくのに、どういう課題を解決していかなければならないかという、まさに生活課題解決学習の側面と、にもかかわらず明日をみて、いまから何を考えていかなければいけないかという生活課題設定学習という、この両面を込みにしたものが、これからの社会教育に必要とされていくのではないか。それはちょうど、私ども人間一人一人の生涯でいえば、今までに生きてきた過去、個人の生い立ちと、それから現在の生きている実状、これからの生き方というふうに、個人の生涯というのは、三つの部分に別れて、そしてこの自分たちの生い立ちの経過をもう一度さっぐてみて、何が欠けていて、何を強みとして、今の青年期が与えられているのか。あるいは今の青年たちは、いかにして壮高年期を準備していくかというような問題は、これは歴史軸として与えられるものです。今の現実そのものをどうしていくかという問は、社会軸、問題解決学習として与えられるものです。わたしはその三つの部分に「見直し学習」、それから「見渡し学習」、「見通し学習」、という言葉を付けております。これら全体を統合して課題解決学習、課題設定学習の両面が浮かび上がってこないか。今日の青年たちが、よりよい明日を迎えるために、あるいは青年だけでなく、高老期にある世代もそうでしょうし、婦人の場合においてもそうですが、今日の過ごし方と明日以降の見通しというのが、常に生涯学習のふたつの軸をなしていく必要があるというふうに、試論として考えているということです。

星　野

このあと、先生にご質問などしたりしながら、意見交換ができたらいいと思っております。



今、那須野先生から青年の問題、とくに後半で生涯学習という観点から、いろんな試論等をお聞きいたしました。このあと、ご自由に話し合いをしていきたいと思いますので、どなたかいかがでょうか。

中　野

先生のお話のなかでは、生涯学習という言葉が、もっぱら使われていたわけですけれど、レジメ等で、社会教育とか、生涯教育、生涯学習という言葉が、色々出てくるんです。この問題についてわからないものですから、言葉の使い方の違いについて、どういうふうに教えたらいいのでしょうか。

那須野

一般的にいわれておりますことは、生涯学習という言葉がそもそも出てきました背景には、一番初期の頃は、生涯教育という言葉で呼ばれていたんですが、生涯教育といいますと、何もかも行政の方でお膳立てをして、実際教育を受ける国民の一人一人が、何となくお客さんとしてやってくるというようなイメージがあったものですから、最近ではそうではなくて、生涯教育の中身である学習、勉強というのは、国民の一人一人が自らすすんでおこなうんだという主体性ということを強調し、それとの関係で最近は、生涯教育といわずに生涯学習という言葉が使われるようになりました。ただ生涯学習という言葉が、前面に出てきましたのが、正式に言いますと、一昨年ぐらいのことですから、名古屋市が生涯教育センターを作りましたときには、生涯教育という言葉の方が一般化していましたので、今も名称は生涯教育センターとなってます。生涯学習センターではございません。これからおそらくできるものは、たいがい生涯学習センターの方で、名称は統一されていくのではないかと思います。

それから二つ目の問題は、その生涯学習がそもそも提唱されてきた背景として、今後は、情報化とか、国際化、高齢化ということに向けて、かなり社会が激しく動いていくだろうと思います。その急激な社会構造の変化に、きちんと私どもが対応していくためには、わが国の教育制度を、学校教育と社会教育という二本立て、もしくは学校教育、社会教育、家庭教育という三本立てで、それぞれの分野が別個の教育に取り組んでいるんでは、どうしてもこれからの学習には対応していけないのではないか。そこで一つ学校教育も、社会教育も、あるいは家庭教育も打って一丸となって、これからの学習社会をささえるような、そういう体系を組んでいく必要がある。今日言われます生涯学習社会とか、生涯学習体系という言葉の中には、そういう学校教育、社会教育、家庭教育の垣根をとっぱらってしまおうという意味が含まれています。ですから学校教育というのは、生涯の中で、６歳から18歳までなり、あるいは20歳、22歳までの限られた期間だけ、生涯のある時期の教育にあたるということだけでなく、リカレント教育で、人生むしろ40、50になっても機会があればまた、高等教育機関等で学習するという新しい学校開放の道も含めて、学校教育、社会教育、家庭教育一丸となって、学習社会を作っていこうという意味合いだと思います。

ですから、文部省では昨年の七月一日でしたか、社会教育局が生涯学習局に名前を改称いたしました。まだ多くの市町村では、教育委員会の中に、学校教育部と社会教育部をおいてるというところが多いのですが、都道府県でもぼつぼつ社会教育という名称を生涯学習という名称にかえつつあります。もう一度、はじめの考え方に戻りますと、学校教育と社会教育が一体となってという生涯学習をという辺りに一番基本的な考え方があるかなというふうに思っております。

宮　川

今のお話と関連して、さっき先生がお話してたわけですけれども、生涯学習という言葉の中身ですね、具体的に、誰が勉強するのかといった意味でとらえた場合と、それからさっきお話の中にあった、生涯を見通しての学習、つまり若いときでも自分が高齢化社会にどういった形でとなると、若いときから勉強するんだという見通しての学習が生涯学習だ、というふうに内容的にみるといったような場合、したがって今まで使われてきた、あるいは文部省が生涯学習局なんていう名前をとったことの意味は、私はやっぱり学習というのは、何も若いときだけ勉強するんじゃないし、いつの時代で勉強するということが必要なんだと、歳いってもやりなさいと、そういった機会を与えなさいと。例えば、さっきお話がありましたように、歳がいって大学に入ってまた勉強するといった機会を増やしていく、社会人が入りやすくするというのも一つのそれだということ、ですからそういたしますと、生涯学習という言葉の中にはふたつあるんですね、何に重点をおいた意味で使っているかによって違ってくるんですが、それはさっき言った二回でよろしいんでしょうか。

那須野

たまたま私、先程の話題提供のなかでは割愛しましたが、このレジメの１の問題所在の中にも方法というところで枠にくくりまして、引用してございますが、これは1971年の社教審答申の中身にもございます。社会教育の範囲を広くとらえるといっても、いっさいの学習活動が社会教育であるということではないと。社会教育の概念には、人々の学習意欲や、学習活動と、それらを教育的に高めようとする作用との相互関係が内在することを忘れてはならないと言うことです。これは社教審答申の中で、はっきりと押さえられておりますところなんですが、ですから人々の自発性や自立性に基づいて、希望することを人々が、主体的にやっていくという面と、同時にやっぱり生涯のことを考えて、積極的に教育作用ということで働きかけて、学習関心を盛り建てていくという両面があるというふうに理解してよろしいかと思います。

宮　川

家庭教育とか、学校教育、社会教育、地域教育といいますか、学区といっていいと思いますが、家庭学習、職場学習、それと並べて、地域という言葉を使うと、しかしそれは間違っているんじゃないかと、地域という言葉を包括しな

いでくれということなんですね。そこでそれが家庭、学校、職場といった学習そのものを包括するものだということになりますと、それぞれの包括されている分野と違った内容が、地域という言葉を使った中で、生まれるだろうからということなんですね。つまり、包括内容ですと、それみないれてしまって、個別的なものが、それを入れてるわけです。そうするとそれぞれが持ってないものが、この三つを包括したことで生まれて来るのではないかということです。

那須野

むずかしいご質問だというふうに思いますが、事例的に申し上げますと、家庭、学校、職場等の機能だけでは、学習展開ができない問題がある。その問題の一つとして、世代間交流ということがクローズアップされてきはしないかとみております。先ほども話しましたように、世代間の関係というのは段々薄くなっていくという面がありますが、地域というものが、老若男女を含めまして共同生活が行われている場でもありますから、たとえば地域の子ども会、あるいは地域の様々な祭り、それから地域での子育てということの大きさが指摘されるようになってまいりました。そういう所では多くの世代が共同して一つのことに当たる、こういう可能性が出てまいりますし、また必要も出て来るだろうと思います。私は今たまたま、名古屋市の子供会の専門委員を仰せつかっているものですから、その中で一つ問題を投げかけていることがあります。いままで子ども会の関係では、小学生が主たる対象になって、中学生になりますとジュニアリーダーがそこから生まれまして、高校生になりますとシニアリーダーが生まれてきます。いまこのジュニア、シニアともなかなかリーダーを育成するのに大変難しい時期なんですが、従来の組織図ですと、そのシニアリーダーの上が、父母の世代に飛んでしまいます。シニアリーダー、ジュニアリーダーが、なかなか育たないということになりますと、勢いお父さんやお母さんたちが、直接に子供の指導に当たるようになってきているわけなんですね。これがいま子ども会では、いろいろと問題になってまして、やっぱり子供たちにとって、世代的に言えば自分達の直近上位の世代といいますのは、青年のお兄さんやお姉さんなんですね。その世代を子ども会のリーダー層の中に、積極的に位置づけていくことはできないか。私は仮称ユースリーダーというふうに呼んでるんですが、大学生なり、勤労青年なり、そういうユースリーダーというものを新しく設けることによって、子供達はもっと多面的な世代間のお付き合いができるようになるだろうと。そうしますと、大人の付き合いは、もっぱら地域の中での子ども会の受け皿作りに重点をかけた仕事をしていくことができるようになるだろう。子ども会というのも地域を基盤に行われているところですので、その地域というものの強みですね。家庭、学校、職場等だけでは生まれ得ない機能を積極的に、たとえばそういう世代間交流とか、世代間学習という形で生かしていくのは、どうかと考えているんです。難しいところですが。

吉　川

そうしますと、いまおっしゃった包括概念というのは、ある意味では解るんですが、それぞれが違った側面を持つとすれば、包括概念である違った面から眺めたら並列概念として考えることはできないかと。

那須野

そうですね。確かに家庭、学校、職場等にはない新たな機能を受け持ってるという意味で言えば、機能別にいえば、並列だと思います。たとえば、家庭の中での世代というのが、ずいぶん狭まってきちゃってますね。それから、職場の中にはいろんな世代がいるんですが、なかなかここがうまく行かないという、いろんな不足な面をフォローしていくというようなこともありますので、たとえば、地域の固有な役割という場合には、並列的に捉えても結構だと思うんです。それを実際に運用して行くときには、地域というものに、家庭も学校も職場も常に目を向けて行くようにという、そういう意味で、大人の方の世代には、まず一つには、名古屋市のある答申の中で提言したことなんですが、ジョブタイム（職場時間）と、ホームタイム（家庭時間）、もう一つコミュニティタイム、地域時間というものを意図的に作っていくことが、必要ではないでしょうか。地域というのは、家庭や職場が暇になったから出かけるというものでなく、１週間の内どれだけでも、たとえ10分でも、30分でも意図的に、積極的に、コミュニティタイムというのを大人の世代が進んで見つけ出して、地域に関わって行くような努力をすることの中で、子供達の世代がそれを見て育っていくのではないかというような提言もしているんです。

中　堀

青年における生涯学習というところで、見直し学習、生いたち学習、生きざまの学習、というふうになってるんですが、生いたち学習というところで信頼感の回復とか、そういう様なことをおっしゃってるんですが、具体的には、生いたち学習というのは、どんなふうなことをいうのでしょうか。

那須野

このイメージとしましては、名古屋市の青年教育の分野では、この生いたち学習というのがここ20年くらい取り上げられてやってきております。それから、先ほどご紹介しました全国の青年団におきます学習活動の中でも、生いたち学習ということをやっております。実際にどういうことをするのかと言いますと、これは一つは、話し言葉、もっと進んで行きますと書き言葉で、自分の生い立ちをそれぞれのメンバーから語ってもらい、あるいは書いてレポートで報告してもらう。そうすると、いつの時はこういうことがあった、それはうれしかった悲しかったとか、その生い立ち上のいろんな事実と、それに付いての感想が出て来るわけです。でそれを巡りまして、周りの青年達がいろいろと討論を行います。こういう点は、自分にも似たような経験があるとか、こういう点は、なるほど自分には経験がないけれども、こういう生い立ちをくぐって、その時

にこういう感想を持ってきた、そのことの積み上げというか、蓄積からみると、今の青年であるA君ならA君という人のいろんなものの考え方、なぜ彼は一方では友達が欲しいと言ってながら、大変根強い人間不信の気持ちを持っているかとか、なぜ彼はああいうふうに楽天的なのかとか、色々その人の現在の気持ちというものを、あるいは意識の持ちようというものが、解って来る部分があるんですね。

でそういうものをだんだんと生いたち学習の中で溜めて行きまして、人の生い立ちや、経験で青年達にとって好ましいもの、かつ自分には欠けているものを、どうやってその経験にあやかっていくか、自分もこれから仲間の中で、そういった人間関係を取り結んで生きるようにするか、という応用問題の段階になっていくわけなんですが、そういうことを繰り返し、繰り返し行ってきたわけです。そうしますと、生いたち学習から生まれて来るものは色々あるんですが、おそらくこのことだけは、確かに言えると思いますが、そこで作り出されました人間の絆のようなものは、これはかなりその後も続いて行くという、もうちょっとやそっとのことがあってもお互いの間が離間してしまうようなことはないという、そういう気持ちは、強く持ちますね。名古屋市で、この20年来ずっと生いたち学習をやってきました青年の中の一番上の世代は、私の知ってる限りでは、50代になりますけれど、この50代も自称青年なんです。私と数歳しか違わないわけなんですが、結構そういう人が、今日でも青年達の学習や、グループ活動の縁の下の力持ちとして、基盤整備といいましょうか、受け皿作りをして下さっているので、大変ありがたく思ってるわけなんです。

今日の青年達にありがちな人間不信のようなものとか、信じきれないと言うようなものを、それぞれの生い立ちの交換の中で、少しづつふっきっていくことができたのではないか、ただしこれには今日の世相を反映しまして、非常に難しい面があります。第一はそういう生いたち学習ということにぶつかりますと、プライバシィ論が出てまいります。何で自分の事を洗いざらい言わなきゃいけないんだとか、隠しておきたい事がいくらでもあるとか。人に言いたくないことがあるという、その時はあんまり無理をしない方がいいと思っています。生いたち学習と言うのは繰り返しの事だと、限りない自己紹介だと思っておりますから、私どもの経験でもそうですが、AさんとBさんが出会いましたときに、二人の間柄というのは、始めはやっぱり表面的なお付き合いですが、段々お互いが気心を知るにつけて、話の中身が深くなっていき、はっと気が付いたときには、お互いに自らのプライバシィを越えてしゃべりあってるという体験があるわけですね。青年達の間のお互いの信頼関係が深まるにしたがって、ひとりひとりが生い立ちで書いたり、語ったりすることが深まってまいりますし、話したり、書いたりすることが、深まって行くことが同時に、お互いの信頼関係につながって行くという、そういう関係になるのかなという気がしてます。私の手元に、今まで20年間の生い立ちのレポートの類、膨大な資料があります

が、これは実際見ていただくと解りますが、青年というのはなんでここまでしゃべったり、書いたりするんだろうという、かなり踏み込んだものがあります。ひとりの青年の中で、繰り返して書いていく内に、表面的なことから段々内面に入って行きますね。ただしそれには時間がかかります。3年から5年くらいの間をとらないと、難しい面もあるかなというふうに思っております。生いたち学習のイメージと言うのはそんなようなことです。

西　尾

先ほど先生がお話をされておりました、例の喫茶店で漫画を読みふけるというような話で、まったく同じようなことをあるお母さんが話をしてるんです。たぶん恋人どうしだろうという男女の間でも、会話がまったく無い。そういう状況を今後なんとかして、いわゆる類型でいきますと人間関係探求、本質型の方へ移行させて行くには、どんな手だてがあるだろうかと、やはりこれは周り、コミュニティや家庭そういったところでの学習活動が、必要になって来るんじゃないかと思うんですけれど、そういった手だてといいますか。私どもの生涯学習教育センター、あるいは社会教育センターとかの担うべき役割と言ったものを少しお教えできればと思います。それからもう一つは、生涯学習教育センター、あるいは社会教育センターが青年講座をやらなきゃいけない。ところがまったく青年達が足を運ばない状況というのは、これは青年の家でもいえる状況というのがありますが、そういった現代の青年達の考えているものの方向性といいますか、どんな所にどんなものを求めてというものを単なる調査ではなくて、実際に青年達から先生がお聞きになっている声がありましたら、お教えいただきたいと思います。

那須野

まず第一番目に、喫茶店で漫画を読みあっておしゃべりしないというのは、友達関係だけでなく、恋人関係でもそうだというお話なんですが、私が近年よく耳にすることでは、恋人どうしの間にもプライバシィと言うのがあるらしいんですね。つまりお互いに越えてはならない一線があると言う。恋人どうしの間にあるだけではなくて、夫婦の間にもあると、若い人たちは、普通平気でそう言いますね。そうしますと、恋人どうしの間でも夫婦の間でもしゃべれない問題がある。それぞれじっと胸の奥へしまい込んだまま生涯を終えていくのかなと、そして生涯を終える直前には、お互いにしゃべりあって別れていくのかなと。解りませんけど、少なくとも1985年の統計調査では、世代別の離婚率が一番高いのは、女性の年齢段階5歳刻みですが30代の前半、つまり30歳から34歳の時に離婚率が一番高い、2番目のピークは女性が50歳から54歳、50代のわが家では、夫婦ともにやっと去年から、50代の後半にはいりましたのでやれやれと思ってるんですが、50代の前半ないし中程というのは、これは理由が解りそうな気がします。やはりその辺までは、本人同士の結婚もあったんでしょうが、家同士の結婚なんて事がかなり多くて、どちらかといえば奥さんの方がもっ

ぱら堪え忍んでやってきて、御主人がいよいよ定年というときに、あるいは一番末っ子が成人になったとき、これを機会に、夫婦の関係を清算する。ところが30代の前半というのは、結婚して数年後、子供が就学前くらいのところになりましょうか。それが問題になりましたのは、東京都の事例なんですが、1985年をはさみまして東京都では毎年、離婚した女性で幼児を抱えて働くことができないので生活保護を申請した女性の中で、30代前半の女性が年々8割づつ増えていったという時代がありました。ですから単純に100人が、来年は180人になり、再来年は260人なるというのではなくて、180人のさらに8割増しということですから、ねずみ算式に増えていった時代があったわけなんです。

そのことから逆算して、青年期、この中には恋人、友人同士の問題もありますが、この時期の過ごし方がいったいどうだったのか。結婚直前のふたりの付き合い方ですね。特に精神的な付き合い方の問題、これがどうであったのかということが、反省させられるようになってきたわけです。でその時期の付き合い方を見ても、やはり先ほど言いました、「まあほどほどに」タイプですね。「ではさようなら」では、もう恋人でなくなっちゃうわけですから「まあほどほどに」タイプというのは、やっぱり恋人同士の間でもかなり色濃く根付いている。その背景をなすものは、これは私の勝手な推論ですので、果して一般的な承認を得られるかどうかわかりませんが、その背景の一つに、今日結婚前の男性の方からする理想の異性像と結婚前の女性からする理想の異性像が大げさに言うと日本の歴史始まって以来、青年層で一致してという問題があるように思います。今まで男性の理想とする女性像と、女性の理想とする男性像が、一致した時代というのはあんまりなかったと思います。近年ではともにそれは、「優しさ」という言葉で表現されます。女性からみても優しい男性がいい、男性からみても優しい女性がいい。優しさという言葉で、一致するような中身、少なくとも青年層が捉える優しさということの中には、相手を傷つけないこと、自分も傷つかないこと、だから、「ほどほどに」ということになるんだと思いますが、この自分も相手も傷つけないという、それが優しさだと言う考えは、かなり深く浸透してきているんではないか。ですから、恋人同士の関係の時にも結婚前に必要な事は、お互いにつらいことでも話し合って問題を解決していくということではなくて、それは寸延ばしに延ばしていってしまうか、お互いの心にしまいこんでしまう。

しかし結婚すれば、やっぱり家庭生活というものには、いくら自分達が考えまいとしても、周りから起こってくる問題が、いくらでもありますね。家族計画をどうするか。その時、子育てはどうするか。将来、その子供の教育はどうするか。家の問題はどうするか。様々な問題が出て来ると思いますが、そういうものを寸延ばしに延ばしていく、そういう精神構造の中で、30代の前半に入って、ある日気が付いたらもうお互いの間には、越えることのできない高い壁ができてしまった。同じく越えることができない深い溝ができてしまったような

状況になってしまうのではないか。それは実は、その都度、その都度、問題をつらい思いをしても解決してこなかった事のいわば総決算がつけになって回ってきたのではないか。そこの辺りの所を、私は恋人同士にも大切なことなんですが、もっと青年期一般の学習なり、教育の中でどれだけ解ってもらえるかという、そういう教育する側からの挑戦が必要だというのですが、たぶんそういう時は、あまり青年達は聞く耳を持たないのだと思うんです。端的に言えば、そういう事で講座を開いてもあまりこないんだと思うんです。やっぱり教育の仕事というのは、数の問題ではなくて、蓄積の問題ですから、特に公的な社会教育の分野などでは、たとえ対象が5人でも7人でも、繰り返し繰り返しやっていく必要があると言う気がするんですね。それは青年達が一般に、教育施設に集まらないということでも、共通の問題がそこにあると思いますね。

社教センター主事さんを目の前にしてこういう事をいうのは失礼なんですが、日本のあちこちの町へ行きまして、社会教育主事さんとお話すると真っ先に出て来るのが、「青年が見えません」という言葉なんです。それから2番目に、「青年が集まりません」という言葉なんです。青年教育に当たっている当事者の社会教育主事さんがたが、青年が見えない、青年が集まらないというふうに言うと、この人はすごい事をしゃべっているなあという感じになるんですね。その中でたとえば、名古屋市の私どものように、いや青年見えますよとか、青年は集まるところには集まりますよというと、この人間はほらを吹いてるんだと、奇妙な目でみられるんです。青年が見えない、集まらないっていってるほうが、無難なんですね。これで言えば「ほどほどに」お付き合いできるんです。事実、名古屋市の社会教育施設の中でも、青年がかなり集まってるところがあるんです。数は少ないんですが、これはもう公認の事ですからお話してもいいと思いますが、たとえば事例研究で研究してごらんなるのでしたら、名古屋市の港社会教育センターへ行かれるとよく解ります。他の所は、まあ適当に集まって鳴かず飛ばずの所が多いのですが、港社会教育センターへ集まった青年というのは、毎年顔ぶれが違います。いつも新顔が3分の1ぐらいいますし、運営が実に良いんですね。ああいう雰囲気を作り出すことに成功すれば、青年たちは楽しいんじゃないかな、集まるんじゃないかなあ。これは青年学級の中で運営委員会を作っている青年の人たちが頑張っているわけですが、かなり肌合が個性的です。ここでは、「ほどほど」のことをやってないんです。時にきつく当たることもあるんです。ですが、それが旨く相手の青年たちの心をつかんで、その相手の青年たちが言いたいことを引き出してやってる感じなんですね。そういう青年たちも、数少ないですが名古屋市に育ってきていることも事実です。先ほどお話した生い立ち学習の一つの成果かなと思ってるんです。相手の気持ちをくみ取るのがかなり的確で、上手で、それを旨く皆の話題にのせて、私もときどきその教室に伺っていますが、なるほどこれだったら面白くて集まるだろうなというような感じがしています。ですから青年と

は、金輪際見えなくて集まらないものだという傾向はあるかも知れませんが、そう言いきってしまっては、先が見えてこないなあという気はしているんですが。

西　尾

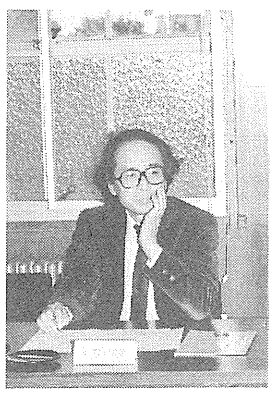
港社教センターの青年達というのは、自分たちでビラを配って動いていた青年達ですか

那須野

はい、ただそのビラを配るのも、そこの港社教センターの青年たちが、昨年第二期の講座を開くときに、地下鉄の入り口で150枚ビラをまきましたが、それでビラを見てやってきたというのが、ひとりだけだったんです。確率は150分の１なんです。そこで諦めないところが良いんです。地下鉄が駄目だったら、バス停へ行こうと、どういう違いがあるか解りませんが、それが駄目だったら、今度は港区内にある各企業を訪問しようと、へこたれずにやってますよ。そうやって集めて来るんですね。

星　野

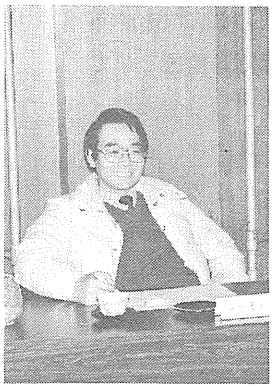
先生の話を聞いていて思うんですけど、ストレートにはおっしゃってないように思いますが、絆を作っていくとか、あるいは関係をつくるような教育というのか、いま、やっぱり生涯学習の分野でも、どうしてもコンテント、つまり何かを教えようということに重点がいく。こんなに良いものを提供してるのに人がこない、とこうなってきているんですね。そこも大事だと思うんです。コンテントレベルの教育でされてきても良いんですが、もう一つプロセスから学ぶといったら良いんでしょうか、関係を通して学ぶという、その辺のとこに、もっともっと意識していかないと、ものを提供しても駄目でしょうし。あるいは、将来縦糸でとおっしゃいましたけど、その中で学んでいくというのは、中身だけじゃなくて、いろんな人が集まって来る、そのお互いの関係の中から、それぞれがつかみとっていくという、そういう視点が必要だし、その視点を共有するためには、ファシリテートできる人をもっともっと養っていかないといけないということを痛切に感じるんですが、そのへんはいかがでしょうか。



那須野

おそらく、これから私どもが社会教育の分野で生涯学習に取り組んでいくだけでなく、先ほどもお話しましたように、学校における学校開放や、リカレント教育をやっていく場合にも、いまおっしゃいましたようなことは、かなり大切なポイントになっていくんではないかと思うんです。一方では、これはまだ充分には議論されつくしていないと思いますが、「生涯学習振興法」の基盤になります中央教育審議会の答申の中では、生涯学習で学んだことの単位認定と単位の互換ということがうたわれていますが、これはかなり議論を詰めないと本物にならないと思います。一方では生涯学習というのはそういう面もあると同時に、しかしそこへやって来る人たちは、環境や条件次第では困難な立場を

背負いながらやって来るわけですから、学習のプロセスそのものと同時に、学習と学習の中間をフォローするシステムを開発していく必要があるのではないかというふうに思っているんです。



このレジメの右側の一番下にも書いてございますが、一番下に生活学習から生活史学習へというふうに、つまり単に横軸の生涯学習でしたら生活学習で良いんですが、縦軸、歴史軸も含めた生涯学習ということを考えていくとどうしても生活史、ライフヒストリーということが必要になってくると思います。私が生活史学習という言葉を使いますベースには、そのプロセス論としての一つの集団論のようなものがございまして、それを私は生活集団という言葉で呼んでいるんです。これは機能集団という言葉に、対置させて生活集団という言葉を使っているんです。それは何かと言いますと、人格のまるごとのふれあいということなんです。たとえば、民間のカルチャーセンターというのをとってみますと、確かに表に見える限りでは、つまり機能的に言えば、カルチャーセンターにでかけて、1時間なり講義を聴いて知識を得て帰って来るだけなのですが、私はそれだけの機能でカルチャーセンターが限定されていたら、おそらく今日ほどカルチャーセンターというのは盛況の状況にはならなかったのではないかと思います。これ以降は、カルチャーセンターとしては預かり知らぬことかも知れませんが、実はカルチャーセンターの講義が終わってから、その近くの喫茶店がよく満席になるというお話がございます。お母さんがたは、三々五々喫茶店でおしゃべり、問わずがたりの四方山話ができるという、これがかなり大切なところかなと。私は実は名古屋市の植田学区というところの地域学習に関わってるんですが、その出席者の一人から、「天白区の植田学区は他のところと違って、朝8時くらいから喫茶店が開いてるから来てごらんなさい」と言われました。一度うかがいましたら、子供を学校に送り出してからでしょうか、近くのお母さんが喫茶店にたむろしているんですね。いろんな情報交換をしているんです。昔の井戸端会議がいま喫茶店会議だと、その人が言っておりましたが、そういうものがベースにあって、たとえば学習ということが、表層に現れる機能としての学習ということのほかにもっと生活に密着したところでおこなわれているという面があるのではないか。私が機能集団といいますのは、ある単一目的だけで集まって、一時的に形成される集団で、それはたとえば必要なテーマを決めて、必要なテーマについて語ることはあるかも知れませんが、機能集団というのは、原理的にはそれが終わればおしまいということになります。

生活集団というのは、特別に何かテーマをしつらえるわけでもなく、しかし、三々五々集まって、問わずがたりの四方山話ができるような、そういうものをベースにして、その上で学習活動を展開していくということを、青年教育の分野ではやっているわけなんです。そのために青年の人たちは、名古屋市に、宿泊青年の家は別にしまして、都市型の青年の家が四館ありますね。瑞穂青年の

家、熱田青年の家、中村青年の家、北青年の家こういう名前ですが、ここへ集まって来る青年達は四館共通して、自分たちでお金を出し合って、近くのアパート、マンションを一軒借りまして、「たまり場」を作っています。どうも「たまり場」というと行政の方々は、それはあまりいい言葉じゃないな、なんか非行青年の吹き溜まりのような感じがすると言うんですよ。では行政用語としては、うまい翻訳をして、ユースサロンとでもなんでも付けておいて下さいと言ってるわけですが、そこでいろんな悩みごとの相談や、うれしいにつけ、困ったにつけ、悲しいにつけ、集まってきておしゃべりをしているというのが日常的にあるものですから、これがかなりベースになっているかなという感じがしてます。

中　堀

それと関連して、社教センターとか、青年の家というところには、あつまらないけれども、それ以外に自分たちで集まって、いろんなことをやっているというのが、いっぱいあるんだろうと思うんですね。何かそんなふうなことを先生はどういうふうに評価されてるか。あるいはどんなふうなものがあるんか、私はあんまり知らないものですから

那須野

そういう集まりというのは、こういう表現をしてはまずいかも知れませんが、ピンからキリまで、たぶん沢山あるんだと思います。私の夢の一つは、教育委員会がうって出て、テレビ塔下にたむろしている、竹の子族を何とか旨く学習に組織することができないかなあということを考えているんです。これはまんざら夢物語ではなく、かつて5年前の1985年に、国際青年年というのがございました。ＩＹＹ（International Youth Year）ですが、国際青年年の名古屋市における事業の一つに、鶴舞公園の運動場を借り切って、一万人を集めてお祭りをやろうという計画を立てたことがあります。結果は大成功で、一万人の目算が二万人集まったんですが、面白いのは、実行委員会方式で、行政の方達がなんでもお膳立てして、青年に、さあいらっしゃいと言うお客さん方式にしなかったことです。ですから、刻々と時期は迫って来るけれども、青年達はのんびりしているということで、行政の方達はやきもきされていたんだろうと思いますが、大変辛抱していただいて、何とか実行委員会を中心に、当日へ持ちこんだんですね。

そうしたら、実行委員会の青年達がどこへ行ってどういうＰＲをしましたのか、当日、迷彩服を着て、おもちゃの機関銃をもって、おもちゃの鉄かぶとをかぶった一隊がはいってきたんです。私は始め、自衛隊も参加したのかなと思ったんですが、そうではなくて迷彩服なんて売ってますね。かっこいいと思って着る青年達がいるんですが、彼らは始めは、冷やかし半分で勝手に遊んでいたんですね。これは私ども大人にはできないことだと思ったんですが、青年達の実行委員のひとりが、彼らにぴたっと張り付いて、彼らを一所懸命に面倒みは

じめたんです。舞台へ上がりたいと言えば飛び入りでやらせるし、そうして1日終えて、後片付けですね。なにを思ったのかその迷彩服が、最後まで空かんを拾って、それで掃除が終わったことを見届けて、どこかへ消えていっちゃったんです。実行委員会に聞いても、彼らの所在が解らないんです。一日限りのお付き合いだったんですが、結構青年達が自前でやり始めると、いろんなところの青年を集めて来るもんだなという感じがしたのです。これはなかなか私自身だって、そういう青年まで組織するというのは、これはおそらくできないと思うんです。青年自身はやってのけちゃう面があるわけですね。なんとかそういう時の経験を活かしてその後に、できるだけ青年達に、自分達のお付き合いの和を広げてくれるようにということで、幸いに名古屋市では、教育委員会のご理解もあって、国際青年年の後の継続事業をしています。名古屋市の青年だけではなしに、全国でいろんなタイプの青年活動をやっている人たちを数十人招いて、交流の夕べをもつ。二泊三日でやってるんですが、国際青年年の後、継続事業を毎年やっておりますのは、名古屋市だけです。名古屋市は教育委員会の理解がありますし、そういう青年の中にうまく育ってきた中心の部分、中核の部分がありますから、そういうことが、今日でもできてるというふうに思っております。後沢山あろうかと思いますが、どれも私の見聞の及ぶ範囲外かなと思います。

グラバア

今の中堀先生の質問とも関連があるかと思うのですが、このレジメにあります3番の課題設定、本当になんといいましょうか、面白くて非常に納得するところもありながら聞かせていただいたんですが、これは本当に納得できるなあという体験がありながら、もう一方で言語文化の衰退とか、感受性が衰退しているんじゃないかということに関して、私の最近の例ですと、子供が小学校で感想文を書いてきて、先生がいいと思われるのをプリントして返して下さるわけなんです。それを読みますと、なんか涙が出てくるんです。私も昔読んでるんですが、ごんぎつねの話など聞いても、私たちの頃は単純な視点だったのに、こんなことも考えてるのかというふうに、ある意味で驚かされる面がありました。それから今18.9の学生と一緒にいるんですが、確かに関わるのを恐がったり、閉じたりということはあるんですが、その反面本当に純粋にまっすぐ感じてるとか、考えてるとかとういうところで、自分のその頃を比べてみると、彼女達の方がすごく感受性が豊かで、豊かすぎるゆえにかえって恐がってるんじゃないだろうかと思ったりします。先生はいろいろな青少年と直接に幅広く接してらっしゃると思うので、三無主義、ネタッキー族ということもあると思うんですが、それともう片方、何かお感じになることがありましたらお聞かせ願いたいと思います。

那須野

私もおそらく、ネタッキー族といい、カウチポテト族といい、先ほどもお話

したんですが、100%どこからみてもネタッキー族でこり固まっている人間はまずいないんだと思うんです。ですが現代青年を特徴づけるとすれば、かなり無視しえない、かなり強い表層に現れた部分として、こういう傾向があるということは言えると思うんです。同じように感受性の問題についても、衰退もしくは欠如という場合にも、青少年、子供達はまだ感受性を多かれ少なかれもってると思うんです。ですが、現代青年を論評する場合に、現代青年は感覚、感性は優れているけれど、理性は乏しい、もしくは論理的な思考力に欠けるということがよく言われますが、私は一方では、そういう面があるのを認めながらも、まったく組しているわけではないんです。そこで私は、わざわざ感受性という言葉を使っているんですが、たとえば現代青年は、論理的な思考力が苦手だといいますけれど、我々大人の世代の方が現代青年より論理的な思考が苦手の分野と言うのはいくらでもありますね。たとえば、私は今時計持っておりますけれども、これはアナログの時計なんです。大きい針と小さい針のものですね。その下に申し訳程度に小さい文字が付いていますが、今デジタル時計だけのがありますね。あのデジタル時計は私は不安でもっておれないんです。やっぱり大きい針と小さい針が交互に回りますと、いま何時くらいだなと角度によって解るんですねすね。このデジタルな世界での思考力というのは、一方では悪い影響を与えるかも知れませんが、ファミコンやパソコンの影響で、とりわけ小さい頃からソフト、プログラムに馴染んでるような子供達は、私たちと違った次元での論理的な思考力というのはものすごく発達してるんですね。

ただ問題なのは、現在の青少年を見れば、感性の面でも、理性の面でも、それぞれにいいところを持ちながら、生活体験が全体として不足しているので、その両方を統合することができないでいるということです。感性は感性だけで、理性は理性だけで、バラバラに発達してしまって、これを統合するのは実生活の中でしかないものですから。これはどうでしょう学問的にみた場合、それでよろしいかどうかご検討いただきたいと思うのですが、私が感受性という言葉、あえて感性という言葉とは違って、感受性という言葉を使ってますのは、感受性というのは、理性によって統御された感性の力というふうにみてるんです。ですから考えることと感じることが自分の生活の中で一つにまめられた状況ですね。そこでの人間の立ち振舞いの状態を感受性というふうに呼んでるものですから、感受性が衰退してるということは、理性は駄目、感性は駄目というふうに言ってるんではなくて、それはそれでいいものを持ってるけれど、うまくつながっていないんじゃないかなというそういう考え方なんですね、どうでしょうか。

グラバア

今おききしました生活体験が欠如していて、いいところを持っていながら、それを自分のものとして統合していくということが、欠けているということは、非常に納得できるというか、そういう見方というのは非常に開けてくる見方だ

なあというふうに、聞かせていただきました。

那須野

ですから、私はもう一歩進んで、青年期の学習論の問題として捉えるときに、今日の青年の人たちに、パフォーマンスというのが大流行なんですね。パフォーマンスというのは大いに結構と。しかしパフォーマンス主義に陥っちゃいけないよということをいってるんです。これはどういう意味かといいますと、パフォーマンス主義に陥るというのは、パフォーマンスそれ自体に意義を見つけて、それで自己表現を完結させてしまうということです。パフォーマンスというのは一種の虚構の世界、「おどけ」の演技の世界ですから、そういう意味では、演技の世界でしか自分の真実を主張できなくなったらまずいんで、自分の真実というのは、実生活の中でも主張できなければいけない。それも素直に出て来るようにしなければいけない。それが感受性というもので、パフォーマンスはいいんだけれど、それ自体が目的化してしまうと、むしろ感受性の衰退に道を開くんじゃないかということを青年期の学習の中では考えていますけれど。

まどか

私はここの中では数少ない30代でして、高齢期の問題を青年期の問題として捉えていかなければいけないということを、確かに納得させていただきました。先生の今日のお話の流れを見ていますと、この課題設定のところでも、いわゆる現代青年がどういう時期を過ごしていたか、どういう半生を持っていたかということで特に欠如した部分、穴が開いた部分、そういう所を指摘なさって、それを埋めていこうと、そういう生涯学習プラントが定義されているようにおみうけするんですが。私自身こういう三無主義と言われている方の人間だと思うんですが、言われる方の側として、これは先輩がたが、あるいは大人からみた青年の捉え方、それが欠如と感じてしまうという大人達による生涯学習プランづくりにつながっていく、そしていろいろなところで、社会教育センターで・・・・という大人からみた青年への社会教育の問題となっていくんだと思います。私達自身は、青年どうしの間での学びあいということをかなりしています。それは確かに世代の交流を欠如させてしまう部分だったかも知れませんけど、同種間というのか、同種のもの同志が集まる中で、ある程度の安心感というんでしょうか、その中で自分を短期間の間にぱっとひろげられるという、そういうチャンスがかなり与えられているときには、非常に伸びていったという実感があります。そしてそうでなく管理体制とか、そこで修行しなければならないとか、職人主義というか10年は黙っていろというか、そういう中では、そこでは自分をのばす信頼関係ができないからおのずと閉じてしまう。で閉じてしまう中でのびていかないという実感を持ってしまう。ですから別の場所さがしをしてしまうというかたちで、他の場所においては三無になったり、五無に逃げてしまったり、あるいは何かが欠如しているという不安感を逆に相手に与えてしまう。そんなようなお互いの確認のしあいがないままに学習プランが

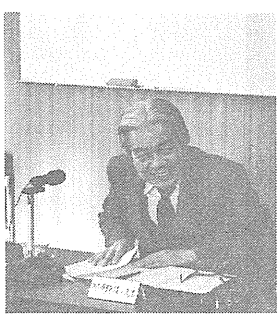
作られていくということは少し残念、あるいは危惧すると言うんでしょうか。そういうものをちょっと思い、時に高齢化教育でと言われましても。これは私が青年を弁護していると言うよりは、むしろ生涯学習というのはどう捉えていくかというところで、サジェスチョンしていただきたいと思ってお話しているんですけれども、たとえば三無主義のこういう青年達、いづれは高齢者といわれる自分の世代と共存している他の世代の人たち、あるは青年層を形成している世代がまだ充分情報を伝えられる今の時点でどういう学習のプランをたて合っておいたらいいんだろうか。今の時代はこういう青年と、こういう高齢者と、こういう幼年期といった場合は、そういう壮年期の親を持ってる、あるいは青年期の親を持ってる幼年という、それぞれのこの十年間の時代の中で、こういう年齢の人たちの共同社会なんだという、世代どうしのコミュニティ作りをどうしたらいいんだろういかというふうに、私自身はコミュニティというと日本コミュニティになってしまうんです。お互いどういうふうに知り合っていくか、人間関係意識というふうに先生がご提示くださった部分では、「まあほどほどに」の共同体づくりが推進するような社会教育の場を設定するのか、あるいはだからこそお互い助け合うというような、だから友達になろうということの呼掛けの社会教育の場にするか。ある意味でかなりはやいスピードで、時代が変わっていくと思うんです。ある時期は「まあほどほどに」の方がいい学習プランでもあるので、なんかそんなような意味で、先生からのお言葉をいただく中で、少なくとも30代の人間にとって、もし高齢社会になって60才になったときに、私自身は何を考えているかというと、今も考えてるんですが、この同じ世代の人たちとお友達になろうと。そこが今の問題でもあるし、60才になってからでも同じ課題を持つだろうと思っているんです。ですから青年をどう捉えるかというと、現代青年というのがいかにも現代の20代、30代といわれがちですけれど、それを現代青年というのか。高齢者にとっても自分が欠如している部分というのか、欠如している青年部分というふうに、捉えたいと思っております。一つ質問なんですが、生涯学習のプラン作りというものは実際教育の制度化につながるとすると、今も日本の流れとして生涯学習という名のもとに作られるとき、どういう方達のアイデアというのが、主流になっているんでしょうか。

那須野

具体的な学習プランを作るプロセスというのは、それは生涯学習にあたるところによって、まちまちだろうというふうに思うのですが、少なくとも私などが関わってます名古屋市の場合には、かなり学習者そのものが参加して、ですから講座が継続する場合には、すでに前期の講座の修了者の中から希望者が、運営委員会や準備委員会のようなものを組んで、それが社会教育主事さんや、行政主事さんの方達と一緒に、自らの手でプランを組んでいくというやり方が、出てきています。私はそれは大変望ましいことだと思っています。どこかで完

ぺきなカリキュラムを作って、さあどうぞということでは、それはあまり集まってこないかもしれませんが、行政の職員の人たち、たとえば社会教育主事さんの中に、今度は逆に何にもなくて、無手勝流で、さああなたたちの自由ですよと言うんでは、責任を逆に果たしたことにならないんで、主事さんがたには主事さんがたで、青写真を作るという責任はあるんですね。それはあくまでも青写真であって、よりよい受講者の意向が取り入れられるような形で修正されていくという、この関係というのを名古屋市の社会教育は、かなりこれを重視してきたように、手前味噌になるかも知れませんが、思っているんです。それはこれからも名古屋市の社会教育で、ぜひ続けて行きたいところなんです。

それからおっしゃるように、私はこれは青年教育の理念という提言で、名古屋市の教育委員会に提出しております提言の中でもはっきりとうたってるところなんですが、たとえば人間の生涯における各世代というのは、たとえば青年期というのは、一方では引続き成長していく世代であると同時に、他方では、人生の中で二度と戻らないかけがえのない時期ですね。自立した時期なんですね。で、自立した時期をになう青年として目いっぱいものを考え動いていくということと、それを通じて、なお自分達は成長過程にあるんだという、この両方をどう青年教育の中で、あるいは青年期の学習の中で組み込んでいくかということが大切だと思います。その点でいえば、今日は対象が青年の問題であり、取り上げる視点が「問題学習」の視点だったものですから、「問題」ということを中心に取り上げてますけれども、青年期の学習を進めていく場合にも親の世代なり、高齢者の世代に対して、きちんと了解を得ておかなければならないことは、山ほどあると思います。私は名古屋市などの高齢者学級へ伺って、世代間交流と言うことが問題になる場合に、はっきり申し上げていることがあります。一方では高齢者の人たちは、青年人たちを見ると、異星人だとか、異邦人だとか言って近寄らないと、青年の方も、何考えてるかわからんから、面倒くさいから、そのままにしておくとかいうことで、お互いにあんまり話し合っていない。そういう場合には、高齢者のほうから、断わられても無視されてもいいから、高齢者は人生の先輩として、すすんで青年に語りかけることが必要ですよ。日本の高齢者というのは、ともすれば下の世代の人たちに、いろいろと言うべきことを言わないでおいて、その下の世代の人たちの行動を見て、まずいことが起これば「ほれみろ」と後ろ指をさす。これはあってはならないことだと私は言ってる。そうではなくて高齢者の人たちは青年に、人生の先達なり、先輩として、価値観が違っても構わないので、言うべきことはきちんと言っておいたほうがいい。その上でその結果何を選択し、どう行動するかというのは、若い人たちの独自のことです。ですからアドバイスは、目いっぱいしといて、で後どうするかは、次の後達の世代の人たちの選択にゆだねるという度量が必要でしょう。そうすれば世代間のトラブルというのは、ずいぶん少なくなるんじゃないですかと言いもしています。いくつかの社会教育センターでは、



そんな世代間交流に踏み切ったところもありますけど、そういう形で、それは単に高齢者と青年の関係だけにつきませんが、30代は30代、40代は40代で、その年代年代に生きて行く方達が今かけがえのない人生の一時期としての、独自の存在としての自己主張の側面と、同時にさらによりよいものを求めて、よりよいものが与えられてではなくて、求めていく面との両面というものを常に持っていると思うんです。その両面を旨く生涯学習という考え方の中で、生かしていくことができないかなと考えているのが、縦軸とか横軸という発想につながって来るんです。

星　野

まだまだ限りないような気がしますけれども、時間に限りがございますのでこの辺で。那須野先生長時間本当にどうもありがとうございました。

■［南山短期大学・人間関係研究センター研究会］　別紙

Ⅰ　現代青年の人間関係意識

1　青年向けのアンケート調査の一節

> 問　あなたはいま、ともだちと話しています。語の途中で、おたがいの意見がぶつかりました。そこで、ともだちがいいました―「君は君、私は私」。それにたいして、あなたも一言どうぞ。―
>
> （あてはまる番号ひとつに○印をつけてください）。
>
> 1.　まあほどほどに
> 2.　ではさようなら
> 3.　だけどなかよし
> 4.　だからともだち

［典拠：武者小路実篤「君は君、吾は吾、されど仲良き」］

2　人間関係意識の「４・３・２・１システム」

(1)「まあほどほどに」⟶ 人間関係希薄型＝４
(2)「ではさようなら」⟶ 人間関係拒絶型＝３
(3)「だけどなかよし」⟶ 人間関係探究型＝２
(4)「だからともだち」⟶ 人間関係本質型＝１

3　課題設定

現代青年を呼称する新語・流行語の系譜

「三無主義」「五無主義」（感受性・共同性の欠除の指摘）
「三語族」（同　　上―特に言語文化衰退の指摘）
「青い鳥症候群」（青少年期における自立性の欠除の指摘）
「ピーターパン・シンドローム」（　同　　上　）
「エイリアンズ」（価値観の相違による世代間断絶の指摘）
「異星人」（同　　上―世代間断絶の深化の指摘）
「新人類」［新感覚的擬音族］（　同　　上　）
「オタク族」（青少年の匿名化と人間関係の希薄化の指摘）
「カウチ・ポテト族」（人間関係の希薄化・拒絶化の指摘）
「ネタッキー族」（同　　上―その深化の指摘）

課題設定

☆感受性・共同性での衰退・欠如
☆自立性の欠如と匿名化・孤立化
☆人間関係希薄化と拒絶化の進行

☆総じて、――

問題点

同質と異質・区別と関連・分化と統合

Ⅱ　現代青年と生涯学習

1　問題の所在

(1)　わが国の生涯学習観［別紙１を参照］

［理念］「生涯にわたる」
「生涯にわたって行う」　――「学習」
「生涯を通じて行われる」

［論点］　＝学習期間論　≒学習内容論

［内容］「生涯の各時期に応じる」
「生涯の各時期における」　――「生活課題解決学習」
「人生の各段階の要請にこたえる」

［論点］　＝生活課題解決学習　≒生活課題設定学習

［方法］　社教審答申

> しかし、社会教育の範囲を広くとらえるといっても、いっさいの学習活動が、即社会教育であるということではない。社会教育4概念には、ひとびとの学習意欲や学習活動とそれらを教育的に高めようとする作用との相互関係が内在することを忘れてはならない。

［論点］　＝要求課題の学習的組織化　≒必須課題の教育的組織化

(2)　青年版生涯学習の現状

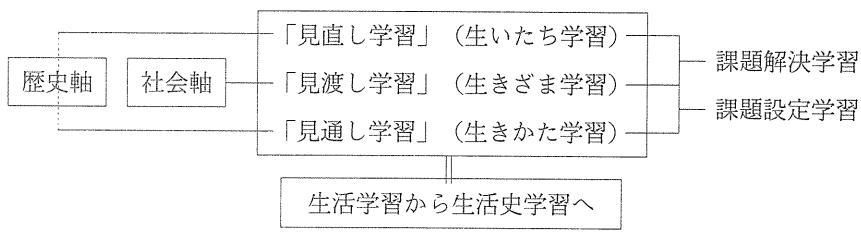
［理念］青年世代の生活課題解決学習

［現状］　＝要求課題の学習的組織化（実態は迎合）
≒必須課題の教育的組織化（実態は放棄）

［論点］「世代別その日暮らし」学習？
「世代別の生涯輪切り」学習？
☆生涯学習における
横軸（社会軸）の重視・縦軸（歴史軸）の軽視

2　青年教育と生涯学習（試論）

生涯学習の縦軸（歴史軸）と横軸（社会軸）の統合［別紙２を参照］



Ⅰ　わが国の生涯学習観

資料１　『急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について』（1971.4.30 社会教育審議会答申）

☆「このような激しい変化の中で、国民のひとりびとりは、その生涯の各時期に応じて新しい生活課題や学習要求をもつにいたり、…」（「まえがき」）

☆「生涯教育という考え方はこのように生涯にわたる学習の継続を要求する…」（第１部　２「生涯教育と社会教育」）

☆「社会教育の豊富な機会を効果的に提供するためには、まず、ひとびとが生涯の各時期にいかなる問題に直面しその問題解決のためにいかなる学習を必要とするかを明らかにして、ひとびとの学習要求をくみとる必要がある。…」（第１部　３「生涯の各時期における社会教育の課題」）

資料２　『生涯教育について』（1981.6.11 中央教育審議会答申）

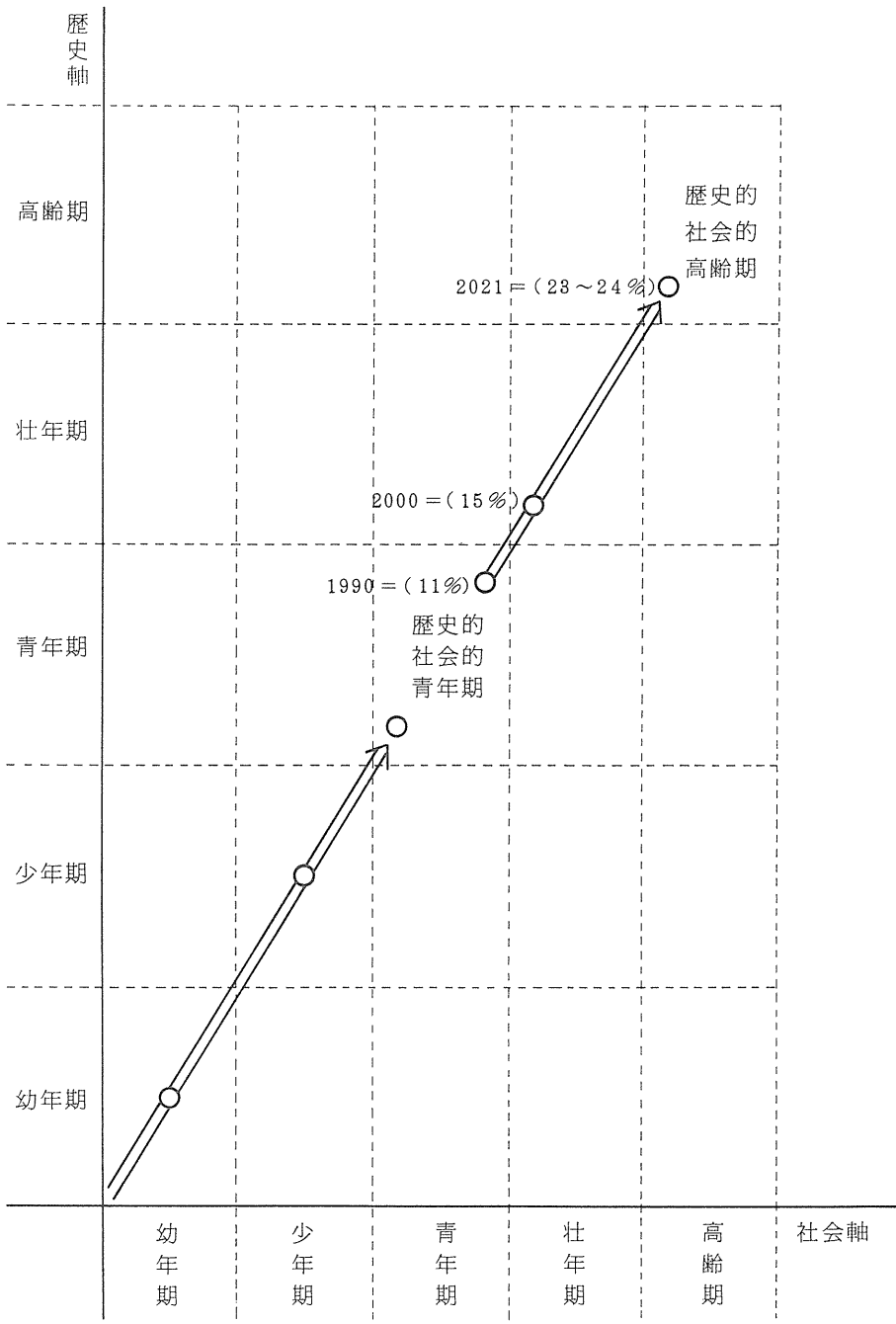
☆「今後の教育の在り方を検討するに当たっては、人々の生涯の各時期における人間形成上及び生活上の課題と、社会の各分野における多様な教育機能とを考慮に入れることが必要である。」（第１章　１「生涯教育の意義」）

☆「生涯教育とは、国民の一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てられるべき基本的な理念である。」（同上）

資料３　『教育改革に関する第１次～第３次答申』（1985.6.26 1986.4.23 1987.4.1 臨時教育審議会答申）

☆「生涯学習体系への移行を目指し、人生の各段階の要請にこたえ、新たな観点から家庭教育、学校教育、社会教育など各分野の広範な教育・学習の体制や機会を総合的に整備する必要がある。」（第２次：第２部　第２章　第１節「生涯にわたる学習機会の整備」）

☆「この答申においても、…今次教育改革全体を貫く基本理念である個性重視の原則と生涯学習体系への移行の観点に立って審議を行い、生涯を通じて行われる学習の成果が適切に生かされるような、総合的かつ有機的な生涯学習のためのシステムをつくる視点から評価の多元化ならびに生涯学習の其盤整備の推進を提言した。」（第３次：「はじめに」）

Ⅱ　生涯学習の縦軸（歴史軸）と横軸（社会軸）

―― 高齢化社会問題との関連で（図中の％は高齢者比率）――